

---

# 桜花夢夜

群青 坊哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜花夢夜

### 【Nコード】

N6799D

### 【作者名】

群青 坊哉

### 【あらすじ】

会いたい。……今すぐ。

漫画「フルーツバスケット」二

次創作小説。

## prologue

毎年お花見はお母さんと二人で夜桜を見にいつてました。

広げたお弁当をふたりで食べるのはとても楽しくて。

でもそんな中いつも不思議だったのが。

毎年決まった、同じ場所でした。食べなかつた事。

丁度草摩のお家のすぐ近くに位置している裏山の広場。

決まって一番奥にある大きな桜の木の下で食べていました。

不思議な事にその桜だけ、きついくらいの赤い花びらを身に纏っていて。

みなさんが近づかないような大木にお母さんは笑顔で私を連れていって。

お弁当と缶ビールを片手にあぐらをかいて木に語りかけているのです。

「どうして木とおしゃべりしてるのですか？」

わたしがこう訪ねると、決まってお母さんは笑顔で答えています。

た。

「  
だ  
っ  
て  
……  
」

## Chapter 1

1

> i 6 5 2 8 | 1 0 5 2 <

「……………?」

「どうしたの本田さん。後ろに何かいるの?」

バイト帰り。

月も出ていない暗い帰路を、迎えに来てくれた由希と共に歩いている途中だった。

由希の声に我に返った透は慌ててそちらを向きなおす。

「あ…………いえ。気のせいだったみたいです」

不思議そうな由希の顔に透は笑顔を作って答える。

(誰かに呼ばれた気がしたのですが…………)

だが、実際後ろを振り返っても気配は感じ取れず。

落ちていく枯葉が、吹き付けてくる冷たい風でカサカサと舞い踊っている様子が暗がりの中ようやくよく見てとれるだけだった。

季節は、11月。

北風と共に長い冬が足音をたててやってくる、そんな時期だった。

「……そう？ ならいいんだけど」

白い息を吐きながらしかし優しく笑顔を返し、由希はまたゆっくりと歩き始める。

外灯も少ない、真っ暗な道。

少しでも離れてしまえばすぐに互いの位置もわからなくなりそうな深い闇。

はぐれてしまわないように透も慌てて足を進めた。  
冷たい夜風が、その長い茶髪を攫っていく。

2

「……そういやおまえ、昨日の夜何やってたんだよ？」

夕飯時。

夾が思い出したかのように顔を上げ、透を見る。

「はい？ ……何がですか？」

夾の言葉に、さしあたって思い当たる節がない。

炊飯器のご飯を茶碗へ盛る手を休め、夾を見返した。

「おまえ、夜中になんか大声でわめいてなかったか？」

「ええ？ わたしが……ですか？」

言つて、大きな瞳をさらに見開く。

「ああ。……しかもなんかすげー音とかしてたんだが……びびって起きちまつたぜ」

「……そういえば。昨日僕も、多分それと同じの聞いたよ。夾君」

テーブルを挟んで透の向かい側であぐらをかいていた紫呉までもが箸を止め透を見る。

「え？ ええ？」

「締め切り近いからねえ。明け方まで起きてたんだよ」

「てめえが生活不規則なのは元からだが。仕事のせいにしてんじやねえよ」

「そうなの？ 俺は全然気づかなかつたけど」

声に振り向くと、夾の向かい側に正座して座っていた由希が、透から受け取った茶碗を片手に視線を天井に泳がせていた。

「まあ、由希君はねえ……」

「寝起き最悪だもんね」

「起きてても最悪な奴に言われたくない……」

「……ああ？ そりゃ俺に言っただんなのか？ クソ鼠」

「はいはいどうぞ。二人とも。喧嘩するのは勝手だけどそれよりも透君でしょう？」

紫呉の言葉で、全員の注目が透に集中する。

「ええ！？ ……と言われましても一体何がなにやら……」

汗を一筋浮かべ透が苦笑した。

「覚えてないのか。……寝ぼけてたのか？」

真顔で問う夾に顔を赤くして縮こまる透。

「え、えと……かもしれせん。すみません……」

「つておい。なんで謝るんだよ」

「みなさんをお騒がせしてしまいましたから……」

「……あほう。寝ぼけて騒がせる、なんざ、おまえよりさらに上を行く奴がすぐそこに居座つてやがるだろが」

「だから、馬鹿猫に言われたくない」

「〜あ？ ちよと待てこら、誰が馬鹿だ誰が」

「反応を示すつて事は、一応認識はしてるんだな。馬鹿猫にしちや大したものだよ」

「〜くおのクソ鼠……っ」

「まあとりあえず、何もなくてよかったよ。でもどうしたんだろかね？ 透君、いつも寝起きとかいい方なのに。何か怖い夢でも見たの？」

「はあ……」

紫呉に聞かれて、首をかしげる。

そつえば……何か夢なら見ていた気がする。

ぼんやりとして、掴み所がなくなつて。

強い印象もない、全く現実身を帯びない夢。

起きたらなんだか忘れてしまっていた。

……でも、どこか懐かしさを感じた……。

「そうかもしれないですね。あまり覚えていないのですが……」

苦笑すると紫呉もにこりと微笑んだ。

「ま。夢なんてそんなものだよ。深く考えこまない方がいいのかもしれないね」

「はい」

透の表情に笑顔が戻った。そのすぐ目の前では、テーブルを挟んだの鼠と猫のデッドヒートのゴングが今まさに鳴り響かんとしていた。

3

その夜

透は桜に囲まれた道を一人裸足で歩いていた。

辺りは真っ暗で。見上げれば今にも吸い込まれてしまいそうな、深い闇。

しかし、気づけば足元に続いていた道ですらもいつの間にか闇に紛れて見えなくなってしまった。

黒一色の世界に、ただ、桜の薄桃色が静かに舞い散る。  
雪のようじに。

透は、その中をただ一心に歩き続けていた。

奥へ奥へと。

進むほどに、自分はそのへ行かなきゃいけない。そんな気がしてたまらなかった。

やがて桜の木々が開け、闇の割合が一気に膨張する。

いつの間にか、後にした桜の花の色も見えなくなっていた。

どこが上なのか、下なのか。左右ですらもわからなくなるような、濃い闇。

その奥に。

一人の、少女とも、少年ともつかない子供が立っていた。

青白く光る小さな体。

その表情は見えない。

「あなたは……誰、ですか……？」

瞬間。

子供の体が宙に浮かんだかと思うと、ソレは一気に透との間合いをつめる。

息つく間もなく。

その小さな、飛び上がる程に冷たい両手が透の頬に触れる。

透の目の前で、ゆっくりと微笑んだ子供は、  
その異様に裂けた薄い唇を開かせた。  
血のような濃い赤が覗く。

そして、

すぐ耳元で囁かれる、ゾツとする程低い声。

『キミを むかえにきたよ』

「!?」

瞳を見開き飛び起きる。

布団を両手で握り締め、懸命に肩で息をする透。

我にかえり、慌てて辺りを見渡せば、

目の前に広がるそこは、暗がりではあるが間違いなくいつもの自  
分の部屋だった。

規則的に響く無機質な時計の音

……それに合わせて、段々と激しかった鼓動が静まっていく。  
そしてようやく、夢だと認識すると、透は先ほど見た映像を改め  
て思い返してみた。

断片的な夢の記憶。

桜の並木道の奥にたたずんでいる子供。あれは  
恨みしか持たない様なあの声を

自分は知っているような気がする。

会った事があるような気がする。いつだったか、遠い昔に

……ふと小さな鏡に目につき、その中に映る自分を見て透は凍り  
ついた。

泥の手形がついている。

それはまるで子供のもののように小さな。そして

それは自分の両頬に。

べったりと。

まるで血のようだ。

4

「元気がないのね……透君」

> i6529 | 1052 <

教室の自分の席に座り次の科目の教科書を出しているその後姿を見、クラスメートで、透の友達でもある花島 咲はいつものように淡々とつぶやいた。

なかなかの美少女ではあるが、その独自のオーラというか、独特の雰囲気のせいもあり周りのクラスメートからは一目置かれている。

「……花島もそう思うか？」

咲の隣で、組んだ両手を後ろ頭に回した背の高い美少女、魚谷ありさもまた、友達である透の背中を心配気に見つめながら言う。

長いスカート、肩に流れる金髪はさらに彼女の魅力を際立ててはいるのだが、逆に彼女もまた、周りに一定の距離を敷かれていた。

が、二人は全く気にしてはいない。

これでも昔に比べたら随分周りに馴染んできた方だ。

それに。

他人が気にならないのは、彼女らがしっかりとした自分を持っているという何よりの証拠である。

彼女らは透の良き友人であり、良き理解者でもあった。

友達という枠を超えた、温かい それはまるで家族のような絆。

三人は大概いつも一緒に居る。

「ええ。……というより、この間から、透君の周りに妙な電波を感じるの……」

「出たよ花島の電波情報」

「なんなんだよそりゃ……」

別に聞き耳を立てていた訳ではなかったが、比較的後ろの席に位置する夾には二人の会話を聞くなと言う方が無理な話だった。

最も、猫の物の怪に憑かれている彼の聴力は普通の人間に比べれば、ずば抜けて高い。

急に会話に割り込んできた夾に、しかし驚いた様子もなく構わずに二人は会話を続ける。

先程から一人黙って席に着いていた彼が、じつと透の様子を伺っていた事を承知していたからだ。

「ええ、そう。とても微弱だけれど。……何かが透君に干渉している事は間違いないようね……」

「何かって、なんだよ。もっと具体的に言えや」

「わからないから『何か』なんだから。馬鹿きよん」

「馬鹿は余計だこのクソヤンキー」

「……透君。家ではどう？」

ほおって置けばすぐにでも勃発しそうな、彼女曰く『心地よい電波』を、しかし無表情で咲が遮る。

「……どうもこうもねえよ」

聞かれて夾は、深々とため息まじりにボヤき視線を再び透に移す。

「ぼけーっとしてるかと思えば、突然大きな声張り上げるし。

夜は夜でなんか一人で騒いでてちつとも寝てねえみてえだし。

……別に、単に寝ぼけてるだけかもしれないけどよ。

……けどなんつか、最近のあいつって……」

「 変なんだよね。最近の本田さん」

その声に見上げれば、一体いつの間にもここにきていたのか、心配そうに透を見ている由希の顔がある。

途端に仏頂面になる夾の様子に笑いながら魚谷は口を開いた。

「よお。王子。お勤めご苦労」

生徒会の会長でもある彼は、度々席をはずす事が多い。最近魚谷はそれを『お勤め』と称している。

それに苦笑すると、由希は今度は咲に向き直った。

「……ねえ花島さん。その電波つて何とか特定できないのかな？」

「なんとも言えないわね……。透君、聞いてもわたしたちにも何も話さないから……」

「あたしさらに心配かけたくないつつうんだろ。……あいつの事だから」

どこか遠くの方を見ているかのような魚谷の表情。言いながら僅かに苦笑する。

「……そうね……。透君はそういう子だわ……」

魚谷の言葉に寂しげに微笑む咲。

「……そういえば。本田さん、この間言っていたよ。変な夢を見るって」

思い出したかの様に顔を上げた由希。

その表情にその場にいた全員の視線が集中する。

「でかした王子！」

「んだよ……んな事あさつさと見えやこのクソ由希」

「それって、どんな夢……？」

夾の吐く暴言に整った眉を潜めながらも話を続ける由希。

「ええと……。確か……桜の夢だったかな……？」

「桜あ？ この真冬にか？」

「夢の話なんだからそういうこともあるだろ馬鹿猫。……とにかく。満開の桜の並木道を一人で歩いている夢をよく見るって聞いた事あるよ」

「季節外れな夢もあったもんだな……。……で？ 何かわかったか？ 花島」

魚谷の問いを受けた、その整った横顔には、彼女にしてはめずらしく少し困惑した色を帯びていた。

「桜……なのかしら……。似たようなものは感じるのだけど……」

5

あの夜と全く同じ夢を、透はここ最近毎晩……いや、寝る度に見ていた。

何度見たって、あの寒気がするような後味の悪さは慣れるもので

はない。

両頬に泥の手形をべっとりとつけられて、恐怖で飛び起きた途端に洗面所へ走り必死に顔を洗う　そんな夜が続いていた。  
やつれて当然だ。

正直、夜が来るのが怖いとさえ感じる。

あの子供

どこかで見た気はするのだが、それがいつ、どこでだったのか、今の今までさっぱり見当もつかなかった。

最後まで顔がはつきり見えないせいだろうか。

……せめて起きている時は。

あの夢の断片を見たくはない。あの夢を思い出したくはない。

ないのだが、自分はどうしてもあの子を……何かを思い出さなくてはいけない、そんな気がしてたまらない。

しかもそれは早急を要している気がした。

寝る度に、その感触が、よりリアルになっていくからだ。

闇の中を流れる冷たい風。

桜の薄桃色の　儚く舞い散る様。

そしてあの子。

あの冷たい手も。

その、声も。

……そして、ほら。

今も聞こえてくる。

自分と呼ぶ、くぐもった声。

『 トオル………』

決して気のせいなどではない。

今では、こんなに近くに聞こえるのだから。

まるで、自分の隣……見上げればすぐそこに居るかのようだ。  
付いて、片時も離れない事を告げているかのようだ。

度々と聞こえてくるその声は

明らかに あの夢の中の子供のそれだった。

> i i 6 5 3 3 0 | 1 0 5 2 2 <

## chapter 2

1

生徒会で遅くなる由希、道場へ向かう夾と別れて、バイトのなか  
った透は一人帰宅路をトボトボと歩いていた。

あの夢を見るようになってから、初めて一人で行動する事になる。

不安が背中を押し、透の歩調は段々と早まっていった。

見上げれば、夕闇に沈んでいく日が恐ろしい程真っ赤に燃えた姿  
を膨張させていて。

照らされた雲もなんだか不気味に見えてくる。

(〜き、気のせいですっ 気にしすぎなのです……っ)

必死に自分にそう言い聞かせ透は家へと急いだ。

家に帰れば、紫呉がいる。

一人ではないという事が、どんなに心強い事であるか。  
この時程強く感じた事はなかった。

やがて。木々が開けて、赤く染まった紫呉の家がすぐそこに見下  
ろせる位置に来る。

(〜よ、よかったです……っ お母さん、なんとか無事につきまし  
た……っ)

安堵感から半泣きになりながらも、透の表情に笑顔が戻る。  
急いで坂を下り、家の中へ入ろうと駆け出した。その時だった。

『 トオル 』

いままでよりも、よりはっきりした声が、  
透の頭に響く。

「……………!?!」

思わず振り返った透は、そこに  
一人の、見覚えのある子供の姿を見つけた。

「え……………」

頭の中で、  
迫る夕闇に、あの、真つ暗な闇色が重なる。

途端に激しく脈打つ心臓。

警告音が体中を駆け巡る。

逃げなければ……  
微かにそう感じた。

意識がぼやけて、体が動かなくて。

それでも、  
瞳だけはその子供に釘付けられて。

『キミはおぼえていないんだね？　ねえさまのことを……』

恐ろしくも冷たい、くぐもった声が

『ねえさまは　しんじていたのに……』

直接透の頭に響く。

『あのことをしんじて、ずっとまっていたのに……』

「…………お…………ねえさん…………？」

ようやく声を絞り出す透。

そのか細い声に、青白い顔がピクリと反応する。

微かに見えるその口元は、  
笑っているかの様だった。

『そつだよ…………ねえさまは』

瞬間。

子供の体が宙に浮かぶ。

透のそばまで一気に飛ぶと、  
驚く程冷たい両手で、そつと、透の頬を触れる。

『ボクのねえさんは、キミたちをずっと まっけて……………』

撫でるように、透の喉元まで小さい両手を下げながら  
ようやく子供は顔を上げ、透の目を見下ろす。

動けない透に容赦なく刺さる、殺気にまみれた

憎しみの色。

『 しんだ』

いきなり猛烈な力で首を締め上げられる。

「くっ ……あ ……っ」

子供とは思えないほど恐ろしい力に透はなす術もなく、

視線だけで人を殺せてしまうような、狂気じみたその瞳と、  
痛みと息苦しさと、徐々に、自分の意識が遠のいていくのを感じ  
た。

（ た、すけて ……おかあさ ……っ ）

「 本田さん!?!? 」  
「 透!?!? 」

どこか、遠くの方で聞こえる、誰かが自分と呼ぶ声。

と、同時に首を締め上げる力が緩む。

支えていた力を失った透の体は、瞬く間にその場に崩れ落ちた。

「本田さん!!」

それを由希が慌てて腕で支える。

「……なんだ？ 一体……何が起こってたんだ……!？」

辺りを見渡す夾。

彼らにはあの子供の姿は見えてはいなかった。

首を仰げ反らせた透の体が、ただ、宙に浮かんでいた様に見えたのだ。

「おい夾……っ」

急に名前を呼ばれ、瞬時に反応する夾。

由希の腕の中で意識を失っている透。

その白い首筋には、赤い痣がいくつか出来ていた。

「……なんかこれって……首を絞められたような跡じゃないか……？」

大嫌いな由希の意見にしかし夾はがなる様子もなく、ただ透の青ざめた表情を黙って見ていた。

2

「君達。なんで透君を一人で帰したの？ 様子が変だって事はもう気づいてたんでしょ？」

紫呉の言葉に今回はかりは返す文句も出ない由希と夾。

24

透の様子がおかしいことくらい、前から気づいていた。

だからこそ最近は二人、ずっと透から目を離さなかったのである。

が、しかし。偶然というものは重なるもので。

今日、互いが互い共、透と一緒に居られないということに、まるで気づいていなかったのだ。

仲は悪いが、それでも互いの強さは認めている。

透が帰った後、その事態に気づいた二人は慌てて用事をすっぽかし透の後を追って帰宅……

そして。

宙に浮かんでいた透を見つけた……、という訳なのである。

『……………』

沈黙を保ったまま、  
それぞれ別々の方向を向いている彼らの様子に、紫呉は大きくた  
め息をついた。

「……………」

と、静かに襖が開いて、  
中からはとりが出てくる。

「 ああ、はーさん。どうだった？ 透君」

紫呉が片手を挙げると、それに一瞥をくれて、はとりは静かに口  
を開いた。

> i 6 5 3 1 | 1 0 5 2 <

「 ……今はショックで寝込んでいるだけだ。少し熱も出ているよう  
だが……ゆっくり寝かせてやればそっちは特に問題はない。しかし  
……………」

『 ……しかし!?!? 』

見事に由希、夾の二人の声が八モる。

見れば二人とも身を乗り出してはとりの次の言葉を待っていた。

二人のその真剣な面持ちを交互に見、はとりは静かに息を吐く。

「……彼女の体は随分衰弱している。その状態がこのまま続くようならかなり危険だ。……一体何があったんだ？」

「それがはーさん。僕らにもさっぱり。訳がわからないんですよ」

「……どういうことだ？」

「……どーもこーもあるか！ わかんねえもんはわかんねえんだよっ」

「はとりにあたるなよ。夾」

「そんなに大声を張り上げると、隣で寝ている透君を起こしてしまいますよ？」

「……………っ」

「……それが、花島さんの話だと、どうやら何か本田さんに纏わりついているみたいなんだけど……」

昼間、咲と魚谷とで話していたことを掻い摘んで説明する由希。

「……それが何かっていうことまでは」

「わからない訳だ。こりゃあもうお手上げだね。なるようにし

かならないよ」

「……………っ!」

相変わらずのおちゃらけた様子の紫呉の言葉に敏感に反応した夾。紫呉の胸倉を掴むと、力任せに引き上げる。

由希は立ち上がりこそはしなかったが、黙したまま紫呉を睨み付けていた。

「僕に怒っても仕方ないでしょう？ 二人とも」

余裕綽々の紫呉の表情に、毒気を抜かれた夾は舌打ちをしてその体突き放す。

「そういうことだな……。とりあえずは本田君が起きるのを待つて事情を聞くより仕方ないだろう」

ほとりの言葉に紫呉はうんうんとうなづいて、

「それから、その専門のエキスパートちゃんにも再登場願いましたよ  
うかねえ？」

まるでこの状況を楽しんでいるかのような紫呉の表情。  
由希と夾は返事の代わりにげんなりとした表情を返した。

しばらくして

紫呉の家の居間には大所帯が腰を下ろすこととなった。

先ほどの、由希、夾、紫呉、はとりに加え、

咲、魚谷、

それから、何故か紅葉と撥春が茶をすすっていたりする。

紅葉は透が倒れたことを聞きつけて、

撥春は、曰く「おもしろそうだから……」と紅葉に付いて来たのだ。

そして、咲と魚谷に挟まれた位置に先程目を覚ましたばかりの透が座っていた。

ただし、顔色は未だ悪い。

「トール！ 大丈夫!？」

「はいっ もう全然平気なのです」

心配を顔いつぱいに表した紅葉に対し、笑顔で軽くガッツポーズを作る透。

「ホントにホント!? 無理しちゃあダメなのよっ」

「へっちゃらなのですよ。心配してわざわざいらしてくださいって本当にありがとうございます 紅葉君……っ」

『……………』

由希や夾は、周りに振りまく透のその穏やかな笑顔と、その白く細い首に残っている生々しい痣とを見ては、それぞれに複雑な表情を浮かべていた。

「確かに。前よりも電波が強くなっているわね……」

花島の呟いた言葉に、魚谷は透の頭をただ、ぼんぼんと優しく叩いた。

向かいに座っていた紫呉がようやく本題を切り出す。

「透君。そろそろ聞かせてもらえるかな？ 一体、さっき何があつたんだい」

が、顔を覗き込まれた透はしかし、とまどいの色を見せる。思いもしなかった彼女の様子に一同、怪訝な面持ちを表に出した。

「……透君？」

「……ですが……」

急かされるがままに口を開く透。

先程とは一転した様子で、紫呉に到達する少し手前のテーブルの上はその視線を落とす。

「ですが、みなさんにご迷惑がかかってしまうのではないかと……」「……ばかかおまえは！……」

そこまで黙って聞いていた夾が力任せにテーブルを叩き、透の言葉を遮った。

「う、あつ は、はい!？」

驚いた透が肩を跳ね上げ、ほとんど反射的に夾を見た。

テーブルの上の握り拳をそのままに、夾は畳を睨みつけている。

「迷惑かけるとかかけねえとか、んな事関係あるか!

つつか誰かに迷惑かけるのなんざ当たり前だろ?! 生きて

んだから……っ」

「え、あ……」

「くお前が一人でしょい込んでるのが嫌だっつつてんだよ……っ

言ったるが……おまえがそんなだと、こっちも調子狂っちまって

仕方ねえんだ……っ

……だから……」

「……夾、君」

「そつだよ、本田さん」

声にそちらを向けば、由希が優しく微笑みかけていた。

「みんな本田さんが心配でこうしてここに集まったんだから。迷惑  
くらいかけさせてよ」

「由希君……」

気づいて周りを見渡せば、それぞれが自分を見ていた。

そこに居る誰もが。  
自分の事を待っている。

待っていてくれる。  
こんなにも

優しい方達。

何か、  
言おうとして口を開きかける。……だが、その感情は上手く言葉  
にはならなかった。

ふいに滲んできた視界。  
溢れてくる温かいものをなんとか堪えようと、下を向いて耐える  
透を、花島と魚谷がそっと抱く。

しばらくして  
顔を上げた透に、紫呉がもう一度、優しく問う。

「……聞かせてくれるよね？」

4

し……んと静まり返った室内の中。

ただ、撥春の茶をすする無用心な音だけが響き渡る。

「……って、うるっせえんだよこのクソガキが……！」  
「……いてて……」

夢の話、聞こえてくる声、  
そして、あの子供の話

透が順を追って懸命に説明する内に、その場にいた全員が難しい顔をして黙り込んでしまった。

まったく現実味を帯びていない話ではあったが、  
話す透の人柄、そして何よりその衰弱ぶりと、首についた赤い痣  
が否定を許さない。

「……という訳なのですが」

「ふうん……。子供に、ねえさん、ねえ……」

「それが桜と何か関係があるのか？」

魚谷の言葉に、透はしかし首を横に振る。

「わかりません……ですがやはり」

「どこかでその子供に会った事があると、そういつのか？」

はとりが口を開くと、透は自信なさ気に頷いて、

「いつ、どこでかは、わかりませんが……」

再び訪れた重苦しい静けさが室内を襲う。

「でも……その子供が言う『キミたち』ってというのは一体誰を指しているのかしら……」

「その『ねえさん』ってのを裏切って、散々待たせた挙句、死なせちまったって奴だろ？」

……そのガキ、何か勘違いしてんじゃねえのか？  
複数形になつてんのはともかくとしても、透が人を裏切るような事をする訳がないじゃんか」

「けど。透君はあの子に会った事があるって言ってる」

紫呉の言葉に黙り込む魚谷。

代わりに、再び咲がせんべいをかじりながらぼつりと呟いた。

「……人……なのかしら……」

「ん？」

「その子供……。本当に人なのかしら……」  
「……どういう意味だよ電波女」

露骨に眉を顰めた夾に、しかし咲は変わらぬ口調で淡々と答える。

「だって……人の気配がしないもの……。ほら。  
今もそこに……」

言って咲の指すその指先は、まっすぐに障子を示していた。

その先は……庭。

「……………っ」

気配を感じたのか、障子を見据えたままその場に凍りつく透。

「くそ……っ　こそこそとしゃらくせえ!!」

立ち上がった夾。

ずかずかと障子に向かって歩き出すと、壊れてしまう程の勢いで障子を左右に開く。

がた……っ

一同の視線が庭へと集中する。

……が、誰もいない。

ただそこには夜の闇が広がるだけだ。

「誰もいないのねー？」

「見えないだけ……。まだ気配は近くにあるわ……。こちらの様子を伺っているようね……」

「なんだあそりゃあ。このままじゃラチあかないじゃねーか……っ」  
魚谷が舌打ちする。

「もし本当に人違いだったとしても、今みたいに相手の接触を待つ事しかコンタクトの術を持ち合わせていないんじゃないじゃ誤解の解きようもないよ」

由希が言つと、夾が未だ氷ついたままの透に向き直る。

「透。おまえ本当に心当たりねえのか？ そのガキの事だけじゃなくてさ、他になんか気づいた事とか……なんもねえのか!？」  
「きづいたこと……」

夕方。

あの子供と会った時、頭の中で何かが重なったような気がした。  
何かが……

「……そういえば……」

「何か思い出した？ トール」

「はい……、あの、夢の事……なんです。……桜を」  
「桜？」

「いつ頃からだっただか……毎年おかあさんと見ていた気がします。歩いていたらような、気がします。あの道を……」

「毎年桜を見に行ってたって……お花見か何かで？」

「はい……多分。……毎年大きな赤い桜の木の下で……お母さんとお弁当を」

「赤い桜？ ピンクじゃなくてか？」

そこまで聞いて、ふいに紫呉が天井へ視線を仰がせた。

「大きな赤い桜、ねえ……はて。どっかで聞いた事があるような……」

「俺も……なんか、聞いた事ある……」

「あかいサクラ？ それって本家の裏にあるサクラ？」

紫呉に、後に続いて口を開いた撥春や紅葉に、魚谷は怪訝そうな顔をする。

「本家って？」

「僕らの実家のことですよ。でもそういえば……確かにあるねえ……赤い桜」

「あ？ 紫呉、んなモンあったか？」

「ああ、夾君は知らないかもしれないね。籍真殿と暮らしていたから。けど僕らの間じゃあの頃は結構有名な話だったよ。

なんてっただってその桜が生える場所っていったら毎年必ずと言ってもいい程『神隠し』が起こってたからねえ」

「……神隠しだ？」

「あー……俺も聞いた事ある……それ」

撥春がぼそつと呟いて片手を挙げた。

「『纏血桜』のことだろ……先生」

「そうそう、はー君それだよ」

「マトイチザクラ？ なんだそりゃ」

魚谷が素っ頓狂な声を上げると、顔は上げずにはとりが口を開く。

「草摩の裏に位置している山に、桜の木が密集して生えているちよっとした広場があるんだが……。もう随分昔から、その一番奥

に生えた太い桜の木だけが毎年必ず赤い花を身に纏う。

その辺りでは昔、毎年春になると人が消えるという、いわば『神隠し』騒動が起こっていてな……。

赤い花が咲くのは、その消えた人間の生气やら血やらを吸い取っているせいだと……前に本家の内部でくだらん噂が流れた事がある……」

「前は……って事は、今はその噂、無いのか？」

「うん。最近じゃあ『神隠し』は起こってないらしいからね。そうだな……」

……俺が3、4歳の頃までは毎年起こってたみたいだよ。『神隠し』」

曖昧な記憶を辿りながら由希が答える。

と、

「あのデカイ木……」

唐突に、撥春がポツリと呟いた。

「昔から目えつけてたんだけど……太縄とか張りめぐらされてあったから……登れなかった……残念無念」

「そんないわくつきの木に登ろうとしてたおまえの気がしれないよ……」

間髪入れず、由希がジト目で春を見る。

「じゃあこいつが母親と毎年行ってたってのはそこののか？」

「さあな。だが……本田君の言う、『赤い桜』というものに、他に心当たりがないのも事実だ」

「纏血桜……」

「そこに行けば何かわかる……かも」

由希の言葉に誰もが頷きかけた、そのときだった。

「来る……」

咲の短い言葉の直後、

夾の後ろ 開けっ放しだった障子から突如吹き荒れる生温かく、  
湿った風。

辺りに流れ込んだ、狂った様に舞う、赤い花びら。

「うな、なんだ……!？」

全員が両腕で顔の前を保護し、庭から目を背ける。

透を除いて。

『キミたちはよんでないよ……』

直接頭に響く恐ろしい程低い声に思わず全員の背筋が逆だつ。

透の瞳に映る、裂けた真っ赤な口。

「だ、誰だ!？」

5

「だ、誰だ!？」

由希が怒鳴った瞬間、吹き狂っていた風が一瞬で止む。

全員が顔を上げた、その視線の先には子供が宙に浮かんでいた。狂気じみた目で全員を見下ろしている。

『呼んだのはトオルとキョーコだけだよ。キミたちには用はない……邪魔なだけ』

「……キョーコ……って」

その響いてくる子供の声に、また、魚谷が呟くその声に、透が強い反応を示した。

「おかあ……さん……?」

『キョーコだけがない……どこにもいない……どこにいるの?』

トオル……隠してもダメ……早く連れてきて……でないと……』

「ま、待ってください……っ おかあさんは……！ もっ……っ」

（ イナイノ德斯……っ ）

たった一言。

それだけが出てこず、言葉を詰まらせる透。

「ちよつとまで！ なんで今日子さんが……こいつらが、そんな裏切るとかする訳がねえだろが！」

魚谷がその場に立ち上がり食って掛かろうと子供に向かって駆け出した。

「ちよ……待て！ あぶね……！！」

夾が魚谷を振り返る。そのすぐ後ろで、子供がその小さな掌を魚谷に向けてかざす。

『 じゃま 』

「うおちゃん！」

透が叫ぶのと、

咲が魚谷を突き飛ばしたのはほぼ同時だった。

子供の掌に強烈な光が宿り、

一瞬で、先程まで魚谷が居た場所の畳を黒く焦がす。

やがて静かに、細く昇る焦げ臭い匂いと黒煙。

『キョーコとふたりでぼくのところへおいで……トオル。でな  
いと……』

立ち尽くした透を真っ直ぐに見下ろし、子どもはさも愉快そうに  
笑みを浮かべる。

『代わりに……、キミのだいじなともだちが消えてしまっても知ら  
ないからね……』

「さつきから黙って聞いてりゃあ、訳わかんねえ事ばっか好き勝  
手ぬかしてやがんじゃないやねえぞ！ このクソガキ！！」

「夾君！」

「夾！ やめなさい！！」

透と紫呉の静止の音が響く中、夾はその子供に全力で突っ込み、その拳を振り上げた

そして、拳はむなしく宙を霞める。

気づけばすでに、そこに子供の姿はなかった。

「……………気配が消えたわ……………」

「……………ちくしょ……………！！」

着地した夾。ついた地を力いっぱい殴る。

「……………おかあさん……………？ ……どうして、おかあさんが……………」

表情の無い青い顔で、その場に力なく座り込む透。

「……………絶対人違いだってそんなの！ ……だって、だって今日子さんがそんな、恨みかうような事するわけねえだろ！？ ……透！」

先程まで呆然と焦げた畳を見下ろしていた魚谷。

透の声に我に返ると、彼女の両肩を思いつきり掴んだ。

「……………うおちゃん……………」

「でもこれで一つ、はっきりしたね」

静かに響く紫呉の声に一同そちらを向く。

「それってどういうイミ？ シーちゃん……」

「あの子供の正体ですよ」

不安そうな紅葉の頭に、その大きな手を置きにこりと微笑むと、紫呉は足元に落ちていた赤い花びらを一枚、指で摘んでみせた。

「……これは十中八九、あの桜の花びらだしね。……それに透君」

「……はい」

「君が例の夢を見たのって、確か一週間前の話だったよね？」

「それがどうしたの？ 紫呉」

先を急かす由希の視線に、しかし紫呉は微笑してからゆっくりと口を開く。

「実はね、僕今思い出したんだけど。あの『纏血桜』なんだけどもねえ。

無くなっちゃったんだよ」

「あ？ 無くなっただだ？」

「……どういうイミ？ 先生……」

「だから文字通り無くなっただですよ。 切り倒したの」

「切り倒した……？」

「なんでまた」

「……元々、周辺の住民から苦情が出ていたんだ。気味が悪いと。

あの桜がつける花は、本当に血を思い出させるような色をしていたからな……丁度、その花びらの様に」

はとりがそう答えると紫呉は楽しそうに微笑む。

「そうそう。赤い桜の花つて一言で言っても、色の濃い加減がありますからねえ。……これはまさしくあの桜の花ですよ。」

もう存在さえしないはずの花びらが、なんでまたこんなに大量に降ってきたんでしょうかねえ？」

「だけど……花びらの色だけで決め付けるのは、ちょっと早くないかしら……？」

「『纏血桜』が切り倒されたのは丁度、一週間前だよ」

「……一週間」

「透君が夢を見始めた時とぴったり重なっちゃうよねえ。……それとも。これは単なる偶然かな？」

「……」

「透君のおかあさんが『纏血桜』と何を約束したのかはしらないけど。とりあえず行ってみる価値はあるんじゃないかい？」

「くでも！ トール一人だけじゃ絶対、絶対危険なの……！」

「コイツに行かせたらあのクソガキの思うツボだろが！ ……俺が行ってくらあつ てめえらはここで待ってる」

「 待てよ来。俺が行く」

「あ？なんでクソ鼠が……！？」

「おまえじゃ所詮相手に突っかかるだけだろ。話にもならないじゃないか」

「相手は桜の化け物だぜ？！ 話す必要なんざあるか！

行ってぶつたおす！これで十分だ……！」

「おまえに素直にぶつたおされてくれる程相手も甘くないだろ……」

「なんだとクソ鼠……！」

「はいはい二人とも。喧嘩はそこまで。」

睨み合った由希と夾の頭を掴んで紫呉が引っぺがす。

「邪魔するなよ紫呉」

「これは俺とクソ由希の問題……っ」

振り返った二人の視線に飛び込む透の必死な顔。

「由希君、夾君。お願いします……わたし……、

……わたしも、連れて行ってください……っ」

「あ？ ……何馬鹿めかしてんだよ。危ねえだろうがっ」

「そうだよ。本田さんは危険だから、魚谷さんや花島さん達とみんなでここで待ってて？」

二人の言葉に、

返事の代わりに、白く細い手がゆっくりと伸びる。

二人の上着の裾を、ただ、ぎゅっと握った。

「透……」

> i 6 5 3 2 | 1 0 5 2 <

「～おねがいします……っ 足手まといなのはわかっています……  
だけど……、行かなきゃ……っ

わたしが行かなくてはいけない気がするんです……っ」

「……本田さん」

「　お願いしますっ　由希君、夾君っ　……わたしを連れて行ってくださいっ」

小刻みに震える細い体で、それでもその場に必死に立っている。

今にも溢れそうな涙をぐっところえて自分達を見据えた、強い光を帯びた大きな瞳。

掴んだまま、決して離さそうとしない小さな手。

固い意思の込められた　力ある言葉。

「……………わかったよ……………勝手にしろや」

言って頭を軽く叩く、力強い手。

「……………俺から決して離れないでね？　……………絶対守るから」

裾を握り締めていたその手にそっと触れる大きな手。

「　由希君……………夾君っ　ありがとっございますっ」

二人の温かさを直に感じ、堪えていた雫がただ静かに溢れ出す。

涙交じりの声が居間に響き渡る中、紫呉がぽつりと呟いた。

「いいねえ……青春だねえ……」

「……先生もますますもってオヤジ臭いネエ……」

## chapter 3

1

家を出る時、振り返った時計はすでに午後9時を示していた。

毎日登校する際通る住宅街。

暗く、静かな細い道をただ、由希と夾に続いて歩く。

彼らが付いて来てくれるという、こんなに心強い事はない……のだが。

(……由希君や夾君が危ない目にあってしまうのではないかと心配です)

子供は言っていた。

自分と、母親以外には用がない、と。

二人で来なければ、自分の大事な友達をも消す、と。

由希や夾だけの話ではない。

ひよっとしなくても、今紫呉の家で自分達の帰りを待っているその全員にも危害が加えられる場合も十分に考えられる。

(……まあ電波女だとか、春の奴も残ってるしな……)

ジャケットのポケットに両手を突っ込んで黙々と先頭に行く夾も、透と全く同じ事を考えていた。

行くと申し出た彼らを何とかなだめて出てきたのも、こういった理由があつたからだ。

「……………」

『相手は桜の化け物だぜ?! 話す必要なんざあるか!』

(……てめえのこと棚に上げてよく言えたもんだよな)

僅かに自嘲じみた笑みを浮かべる。

バケモノ

かつて、いや今も。

自分こそこう呼ばれる生き物ではなかったか。

まさか、自分でこの言葉を吐くなんて、思いもしなかった。

(……案外、簡単に出るもんなんだな……)

相手を拒絶する為に呪う言葉を  
。

(神隠し……か)

ただ一人、由希だけは別の事を考えていた。

由希がまだ幼い頃。毎年春になると、本家では神隠しの噂で持ちきりだった。その当時の事をぼんやりと頭に思い浮かべる。

随分昔から続いていたと言うその『神隠し』の話には決まって『赤い桜の大木』も登場した。

(確か、あの大木にはまだ何か謂れがあったはずだ)

その『桜の木』と『神隠し』という、全くの相異なるものが一つに結ばれる理由が。

『桜の木』、それこそが神隠しの原因だと噂された、謂れが。

が、なにぶん由希がまだ小さい頃の話なので、どんなに思い出そうとしてもそう簡単に引き出せるような記憶ではない。

(……確か、俺が4、5歳位の時に『神隠し』はぴったりと止まったんだっけ……)

改めて考えると、至極不思議な話ではある。

本当に、毎年春になると『神隠し』が起こっていた、として。なんで突然止まったんだらう。

毎年人が消えていたのに。

ある年、突然。

その年に何か、起こったのだろうか。

(『神隠し』の犯人が捕まったから……、とか……)

『血の色を纏う大木』というものを実際に見た事がない為か……  
由希には、どうしても『桜の神隠し』を信じる事が出来なかった。

……実際にあったと仮定してみても。

どうして桜の木が人間を消したりするのかわからない。

あの子供のことも。

何を考え、何をしようとしているのか、全くわからない。

わかっているのは、あの子は「人」じゃない、という事と。

その子供に他の誰であろう、透が狙われているのだ、という事。その2つだけ。

( 守らなくちゃ )

「……って、なんなんだよてめえら」

夾の戸惑った声に、思わず顔を上げ  
由希はそこでようやく事態の異変に気づく。

先程まで人通りの少なかった というか全く見受けられなかった、夜中の住宅街路。

……今では。

いつの間にか人でごった返している。

しかもその人数は、未だ増えつつある。  
見渡せる距離にある家々の玄関から、今まさに人が出て来ようとしているのも見えた。

こんな夜更けに、奇妙とも言えるその密度。

しかも全員、様子がおかしい。

外灯の下、

目は虚ろ、口はだらしなく半開きのまま、感情の読み取れない両

眼でこちらを見ている。

その顔は……ゾッとするほど青白い。

そんな集団が、あちらこちらから一斉に向かって来ているのだ。

真っ直ぐに……黙々と、

こちらへ。

「どうしたのでしょうか……みなさんご様子がおかしいです……」

「どーせあのガキが近くに居やがるんだろ……っ またおかしな真似して遠くから笑って見てやがんだよっ くそ……っ」

「おい夾……困まれたらまずいぞ……」

「……。素人相手じゃ本気も出せねえし……女もチラチラ居やがるな……」

草摩家の物の怪憑きの人間は、

他の物の怪憑きの人間、それ以外の異性に抱きつかれると、それぞれ、憑いている動物に変身してしまう。

由希は鼠、夾は猫へ。

今変身してしまうのは、まずい。非常に。

ばれる、ばれないもあるが。それより、何より

「 由希君、夾君……っ どうしましょ……っ」

守れなくなってしまう。

「こっちだ！」

すばやく辺りに視線を巡らせた夾は、脇に細い横道を見つける。叫ぶと同時に透の手を引き駆け出した。

「え……はっ はい！！！」

「夾っ この道、どこに出るのかおまえわかつてるのか!？」

由希も慌ててその後を追ひ、細い路地へと入る。

「知るかそんなの！ あのまま囲まれるよりやはるかにマシだろ！」

透の後ろを走る由希に叫び返す夾。

その前方に、先程囲んでいた人間と同じような様子の、くたびれたワイシャツを着た男が現れる。

「夾君！ 前……っ」

「……っ」

透の短い叫び声で事態に気づいた夾は、透の手を離し加速するとその勢いで男の脇腹に掌底を叩き込む。

「……き、夾君……よろしいのでしょうか……」

あつけなくその場に倒れた男を飛び越えて走る3人。  
男を振り返りながら走る透に夾はがなった。

「そんな事気にしてる場合かよ……っ　その後ろ見てみる」  
「へ？　うしろ……ですか……？」

言われて、さらに奥を見た透。  
思わず自分の目を疑う。

大人が二人横に並べる程の道幅しかない狭い路地。  
その細い道を、なんともぎこちない　不自然な動きをしたゾン  
ビのような大群が押し合いへし合いこちらへ向かって黙々と走って  
きていた。

ただ真っ直ぐに。こちらへ向かって、伸ばされる無数の手、手、  
手……

「きつと本田さんを狙っているんだろっね……」

結構な距離を走ったというのにしかし涼しげな顔のまま、由希は  
誰へとなく呟く。

「当たり前的事ほざくな　クソ鼠っ」

そういえば夾もそうだ。

おそらく二人とも、自分の調子に合わせて走ってくれているのだ

ろっ。

息せき切らせながら、透はぼんやりと考えていた。

「お。やっと開けたところに出たな。どこだここは……って…  
…」

辺りを見回す必要もない。

その大通りでさえ、すでに大量の人間がこちらへ集まりつつあった。

「 夾っ 早く来い！ こっちだっ」

声に振り返れば、半分バテている透の手を引いて今度は由希が横道に入っていくのが見えた。

「く俺に命令すんなっ クソ由希っ」

「こっちだっで好きでおまえに命令してる訳じゃない。おまえがトロイからだろうっ？」

「ああ？ なんだとこら！ もういつぺん言ってみやがれ！！ この嫌味鼠っ」

「おまえがトロイからだろうっおまえがトロイからだろうっおまえがトロイからだろうっおまえが……」

「くくうるせえええええっ！！」

「うるさいのはどっちだよ。おまえが言えって言ったんだろ？」

「『もういつぺん』つつつただるが！！ 嫌みったらしく何度もほざくなっ」

「 本田さん大丈夫？ 方向はこっちであつてるところから…  
…頑張ろっね」

「さざりと無視しやがんな！ こらっ 聞いてんのか!？」

(……お二人ともすごいです……っ これだけの距離を疾走しながら言い争いをなさっています……っ)

普段なら止めているはずの透だが、この時ばかりは体力も限界に近く思考が低下しているせいかそこまで気にまわらなかった。

静かな、細い道をただ、お互いの息遣いを聞きながら3人でひた走る。

大通りに出れば、また細い道に入る。

繰り返し繰り返し。それは永遠に続くかのように。

刺すような冷たい夜風をきつて。

飛び跳ねる鼓動を、上がる息を無理やり押さえつけて。

ずっと。

自分を引っ張ってくれる、その大きな手。

その温かさが、どれだけ自分を勇気付けてきたか、もはや計り知れない。

(……ありがとうございます)

心の奥で、透はそっと呟いた。

「……つてくそっ！ 困まれちまった……！！！」

しばらくして、絶望しか示さない声が夾の口から吐き捨てられる。

「　　っ　　くかこま……れ……？」

言葉を返したいが、上がる息が邪魔をして声にならない。

もつれる足。激しく脈を打ち続ける心臓が痛くて。  
透は、もはや立っているのがやっとという状態だ。

「　　本田さん、大丈夫？」

その細い体を由希が支える。

「は、い……なんとか、です……っ」

それでも堪えて、状況を確認しようとなんとか顔を上げると、大通りの真ん中　こちらに向かつて四方八方からたくさんの人間が押し寄せてきているのが見えた。

距離はもう近い。

「た、たいへん……すぐ引き返さないと　　っ」

『もう遅いよ』

透の言葉を、  
無情にも、あの冷たい声が遮る。

2

「くんだよ……ようやくお出まじってか……っ」

子供と透の間に立った夾が宙を睨みながら悪態をついた。

『それはこっちのセリフだよ。ようやくチェックメイト……ってところだね。他人事なのに案外粘るね。キミたち。……つかれない？』

ついさつき走り抜けてきた細い路地 そのほるか上空。

小さな青白い顔がその声と共に、闇の中、まるで滲むようにじわじわと浮かび上がる。

「……やっぱり高みの見物してやがったか……胸クソ悪イガキ」  
『うん。ひさしぶりに楽しいあそびだったよ』

裂けた口元を広げ、にこやかに言う子供。

「あ、遊びだと……っ!？」

「久しぶり? …… ってことは前にも君、同じような事をした事があるの?」

周りを警戒しつつ透の後ろを守る由希の問いに、しかし子供は眉を顰める。

『おまえには関係ないだろう? …… っていうか、本当あきれ位強情だねキミたちは。さっさとキョーコを出したらどうだい?』

「……おかあさん……っ」

「まさかてめえそれが目的で俺等走りまわらせてたのかよっ」

『うん。キミたちだけじゃなくて、あの大きな家の方にも手を打っておいたんだけど、なかなか思うようにはいなくてね』

「くそんな……っ」

驚きとも、悲しみともつかない表情で口元を両手で覆う透。

「く心配すんな …… あっちには春もヤンキーも、電波女だって居やがる」

子供を見据えたまま、背中静かに語る夾。

「ですが……っ」

反論しようと口を開いて

気づいた透は思わず、出てきた言葉を飲み込んだ。

夾の腕 固く握りしめたその拳が、震えている事に気づいたからだ。

恐らく、怒りで。

「君の目的は何なの？ 一体本田さん達を捕まえてどうするつもり」  
『おまえには関係ないって言っただろ。早くキョーコを出さないと……』

子供の声を合図に、一体どこからこんなに呼び寄せたのか、さっきよりも数を増したゾンビのような大群がじりじりと間合いを詰め、接近してくる。

「くそ……っ」  
「くっ待ってくださいっ」

由希や夾の間をすり抜けて子供の前に飛び出そうとした透。

「ほ、本田さん?!」  
「おい！ 危ねえってっ」

慌てた二人に腕を掴まれ引き戻される。

『何？ ようやくキョーコの居場所を教える気になったの?』

「お、おかあ……さんは……っ」

その表情は怯えていたが、それでも瞳だけはまっすぐに子供を見つめ返す。

喉元を両手で押さえて、必死に、声を絞り出す。

「くおかあさんは……っ」

透の脳裏に蘇る笑顔。そして

「……っ」

安らかな、寝顔。

哀しい程に、穏やかな……。

「くおかあ……さんは……っ　もう……な、亡くなって、いて……」

(いつでも一緒にです)

いつだったであろうか。

誰かに言った言葉を、今でもどこか信じている。  
自分にこそ、言い聞かせている。

「だからここには……っ　くどくにも……、」

その先に続く言葉が判らない。

口にしたくない。

だって言ってしまうばっ

認めてしまうことになる。

「本田さん……」

「透……」

『死んだ……？　そんな……まさか……』

しかし、透のその言葉に子供は酷く動揺を示した。

『 う、嘘だ！ そんなのっ 』

「嘘かどうかは、彼女の顔を見ればわかるだろ？」

『 ……っ 』

子供は困惑の色を隠せないまま、しばらく透を睨みつけていた。

が、やがて、その色は表情から失われる。

『 ……理由なんてこの際どうでもいいっ とにかく！ おまえ達がねえさまを裏切ったことには変わりないんだ！ 』

「だあらねえさまねえさまっていちいちうるっせえんだよ！ 大体誰なんだよそのねえさまっつうのは……っ」

『 ……ねえさまはねえさまだ！…！ 』

夾の言葉に、過敏に反応する子ども。

『 ……僕のたったひとりの…… かけがえのない……っ 』

漏らした震える言葉と共に、  
子供の表情から、先程までの強い憎しみの色が全て消え失せる。  
そこに見て取れるのは 深い悲しみだけ。

由希も、夾も、そして透も。

その色を、知っている。

『……ねえさまは待ってたのに！ それでも人間なんかを信じて最後まで……。……。それを！ 裏切ったんだっ 理由なんて、……。死んでたなんて関係ないよっ っ関係ない！！』

まるで、自分にでも言い聞かせているかのように、  
子供が大きく叫んだ時だった。

「くきゃあっ」

同時に由希、夾の背後で高い叫び声が響く。  
そちらを振り返った時には、もう遅かった。

「透っ！！」

「く本田さん！」

高く宙に浮かんだその細い体を、子供が両手をかざして自分の元へと引き寄せる。

『 そうさ……関係ないんだ……。だってねえさまはもう……いないんだ……』

その細い腕が透を抱いて、溢れる雫が、透の頬に静かに降る。

ぱらぱらと。

『 おまえの母親になんて会わなければ ねえさまは死ぬ事なかったのに……』

雨のよじり

「……あ、あの」

透が声をかけ、涙を拭おうとその片手をそつと子供の頬に伸ばす。

子供は透のその行為に気づく、が。

もはや怯えの色の無い、透の大きな瞳。

覗き込めば、その深い茶色に吸い込まれてしまいそうな感じがする。

こんなにも細いのに。

抱いた柔らかい体から伝わる体温に、

頬に触れる、包み込むような手の温かさに、

埋もれてしまいそうな錯覚に陥ってしまう

だが……。

顔を再び上げた子供の瞳にはかつての冷酷さが戻っていた。

無情にも、その小さな片手は透の細い首元へ。

「本田さん！」

「クソガキてめえ！ そいつに何しやがる気だ！！！」

そして子供は透のその口元に、  
自分の顔をそっと近づける。

と、同時に、

「……………あ……………」

何か、白い霧のようなものが、  
透の口から子供の口へと吸い込まれていく

「透!?!」

3

「一体何を……………」

由希、夾の見上げる目の前で、

透の体の力が、失われゆく。

透の瞳が ゆっくりと閉じていく

子供が全ての靄を吸い取り顔を上げた瞬間、  
透の体は、かくん……と、まるで人形のように首を傾ける。

子供の頬を覆っていた手は、

力無く、ただ宙にぶらさがった。

「〜本田さん！」

「透!！」

『キョーコが死んでるんなら仕方ないよね……この女だけでももらっていきよ』

「本田さんに ……一体何をしたんだ!！」

『……何って、見てもわからないの？ 生気を吸い取ったんだよ  
「なんだと!？」」

『もっとも今の状態じゃ、まだ完全に魂そのものを体から取り出す

事は出来ないんだけど。

でも、今までみたいに毎晩悪夢を見せてこつちに引きずりこもうとしても、お前達にいつまた呼び戻せられるかわかったものじゃないからな。

トオルには、しばらく夢の中に居てもらおうよ』

「夢の……!？」

「〜どついう意味だこら!」

『現実との繋がりが深いと、それだけ魂を狩り取るのは困難になるんだよ。』

だから夢を見させて、現実から遠ざけるんだ。

夢の中に居る方がいいって。お前達の所に戻りたくないって、トオルがそう考えるようになるまで

ねえさまが昔、やってたみたいに……』

「〜本田さんは! 夢なんかに負けるような人じゃないっ」

「現実逃避かますようなんなヤワな女じゃねえ! 透はっ」

『信じてるんだね。トオルの事。』

……でもね。人間は弱いんだよ?

奥に隠してある傷をえぐって広げてやれば、その貧弱な自我は、痛み能耐え切れなくなつて簡単に溶けて消えてしまうんだ……ボクはいままでそういう人間をたくさん見てきた。

みんな一緒だよ。

みんな……ねえさまが作り出す楽しい夢に酔って現実こゝろを捨てたんだ。

でもそいつら。全員幸せそうだったよ。痛みから開放されたつて。ねえさまはそいつらが捨てた いらなくなった体を養分にするんだ……また来年も人間に夢を見せる為に』

「それが神隠しの真実ってか……。どんだけ昔から人の弱みに付け込むような卑怯くせえ真似してやがったんだ……。てめえら 呆れて物も言えねえ……っ」

『卑怯だって？　ねえさまは人を救おうとしたんだぞ！？』

「救おうとした？　どういう意味なの？」

『だって人間って生きてるのが辛いんだろ？！

意思もなく。毎日ただ馬鹿みたいに流されてるだけだろ！

それなら、永遠に楽しい夢の中で生きる方がそいつらにとって一番いいんじゃないの！？

悲しみも苦しさも辛くもない、ただ楽しい世界で、永遠に……っ』

ねえさまは……こんなにも人間なんかを、人間の事を思っていたのに……。  
なのに……っ！

『……本当はすぐに殺してやるうかと思ってたんだけど。気が変わったんだ。』

トオルもねえさまと同じ目に合わせてやる……っ

ねえさまが一体どんな気持ちだったか……、身をもって味合わせてやる』

「待ちやがれ！ 何勝手な屁理屈並べててめえら正当化させてやがんだ！？」

「本田さんは関係ないだろ！？」

『……トオルには直接関係なくてもキョーコの娘なんだから話は別だよ……』

言葉と同時に、抱いていた細い体を離す。

『現実の悪夢を。キョーコを。今のトオルに見せつけてやる』

「透！！」

「本田さんっ！！」

支えていた力を無くし、はるか上空からまっ逆さまに落ちてくる透の体を。

由希が、

夾が。

その腕に、しっかりと受け止める。

「透！ おい透っ！！ 目玉覚ませっ」

「本田さんっしっかりして……！　　〽本田さん！！」

いくら揺さぶっても、

その青白い体は冷たくなって動かない。

「　まあ、生気を抜き取ったままにしとけば、いずれ体も朽ち果てるだろうけど……」

真上から聞こえてくる、さも愉快そうな声の主を由希と夾はきつと睨み付ける。

「……あいにくボクは、そこまで気長くないからね」

その勝ち誇ったような笑みを合図に、  
周りを囲んでいた青白い顔の人間たちが、再び一斉に歩き出す。

「……ってまさか君、この人たちの生気も……っ」  
「ご名答。吸い取っちゃったよ」

周りを警戒しながら問う由希に、子供は裂けた口角を上げる。

「……てめえ……っ」

「この人間達はみんな、生きる事に希望を失った人間だよ？  
夢の中で、みんなとっても幸せそうに生きてる。」

君たちにどうこう言われる筋合いはないね』

「ガキが偉そうにほざきやがって……っ　んなの、単に騙して寝かしつけてるだけだろが！」

「希望は、決して誰かに与えてもらつものじゃないっ！　自分で見つけるものだよ」

『勝手に言つてれば？　どうせお前達ももうすぐ死ぬんだしさ』

そのいやらしい笑顔に、思わず言葉を詰まらせる由希と、夾。

意識は無いといえ、普通の人間だ。しかもただ、操られているだけの　傷をつけるのはかなり気がひける。

しかしこれだけの人数を相手に。しかも意識のない透を守りながら逃げるのはいくら由希や夾が武道に長けていると言つても、不可能に近い話。

『じゃあ目的も果たしたし、ボクは帰るよ。……まあせいぜい息耐えるまで、頑張つて「大事な人」を守るんだね』

笑いながら。夜空に溶けこむように消える子供。

「くあのクソガキ！！」

「でもこのままだと本当に危ない事は確かだ。どうやら間違つて変

身してしまっても心配いらないうただけど……本田さんが……」

「畜生……っ　　何かいい手はないのかよクソ由希！」

「人を頼らずにちよつとは自分で考えろよ馬鹿猫！」

「なんだと!?　大体元はといえばてめえがこつちの道指したのが悪いんじゃないか！」

「そんなの黙ってても同じことだろ?!　人のせいにはかりするなよっ」

「うるせえ!　そんなもんおまえが……っ!!」

「うるさいのはどっちだ……!!」

(　　ゆ、由希君、夾君……っ　　喧嘩はいけませんですっ)

瞳を見開いて、

二人は、全く同時に腕の中の少女を見る。

瞳を硬く閉じた、少女の顔は、ロウ人形のように青白くて。

その大きな瞳も、かわいらしい唇も。

いつものように動いてくれない。

その温かい笑顔を、自分達に降らせてくれない  
決して。

「……本田さん……っ」

「透………！」

こんなことをしている場合じゃあないんだ。

守らなきゃ。

全身全霊をかけてでも。

俺の。

俺達の。

一番大事な、温かい宝石。

こんなに小さな、

かけがえのないタカラモノを

一斉に、

魂を奪われた、もはや人とは言えない……抜け殻の集団が、3人に襲い掛かる。

『……………っ』

由希、夾は透を庇い、硬く瞳を閉じる。

その瞬間！

キキイイイイイイ……っ！！

けたたましい音と共に、いきなり強烈な光が辺り一面を襲う！

人でないものが、視力をやられて辺りにのた打ち回る。

「な、なんだ……！？」

由希や夾も例外なく視力をやられてしまい、ただその場に蹲っていた。

「……トール！ ユキ、キョー！！ こっち！ こっちなのっ」

いきなり由希、夾の腕を引っ張る小さい者が耳元で叫ぶ。

「も……！？」

「紅葉い！？」

強い光のおかげでまだ視力が回復していない二人はその声にのみ反応して一斉に叫んだ。

> i 6 5 3 3 | 1 0 5 2 <

「二人とも、説明はあとよっ 早くこっちに来るの！」

「ま、まてっ 待てっ！」

「本田さんが、意識を失ってて……っ」

「透！！ 大丈夫か！？」

「つて！？その声……ヤンキーもいんのか！？」

「あたしで悪いか！！　　ったく、おまえら……大の男が二人も揃ってなっさけねえなっ

ほら、さっさと透離せ！　おぶつてくから！」

「おぶつてくつて……魚谷さん一体どこに……」

「ja！　あつちにね車が待ってるのっ　この光は車のライトなのよっ

「く、くるまだ！？」

「……い、一体誰が運転してるの？」

「ハルよ！」

「うなああにいいいいいい！！？」

## chapter 4

1

「〜っておいこらてめえ!! もうちつとまともに運転できねえのか!?!」

「春……一応聞いとくけど、車の運転なんて出来たの?」

「あー……」

由希の問いに、しかし春はハンドルを握った手を離し、運転席からくるりとそちらを振り返ると真顔で一言、

> i 6 5 3 4 | 1 0 5 2 <

「なせば成る……なさねば成らぬ……何事も……」

「〜あほか!!」

「前見て! 前! ハンドル!!」

「ハルかっこいいのーっ」

「……どこら辺が? あの非常識の塊が服着て歩いてやがるザマのどこがどうかっこいいつつうんだ? あ?」

「うわああああんっ キョーがいじめるー!!」

「うるっせえなてめえら……ちつたあ静かにしやがれー!!」

「そうよ……不謹慎な輩ね……透君がこんな事になってしまったというのに……」

咲の一言で、その場に居た全員の顔が神妙なそれへと戻る。

はとりの乗ってきていた車 白のセルシオに、春、紅葉、魚谷

咲、由希、夾……それに透が乗っていた。

運転席には春。助手席には咲が透を抱えて、後部座席は紅葉が、真ん中に位置する由希の広げた両膝の間に座り、それでも夾達は寿司詰め状態である。

間違えて隣の魚谷に引っ付こうモンならそれこそ一発アウトだからだ。

「花島。……どうだ？」

身を乗り出して、魚谷が咲の様子を窺う。

「残念だけど……草摩由希達の言った通りのようね……この体は抜け殻みたいなもの……。透君の電波を感じる事は出来ないわ……」

「そっか……」

「トール……どうなっちゃうの……？」

「このまま魂が戻らなければ……やはり衰弱死してしまうでしょうね……。ただでさえ透君弱っていたのだし……早く戻してあげないと……」

淡々といつもの口調で語る咲。

その細い肩が震えている事に誰もが気づいたが、しかし誰も何も言わなかった

言えなかった。

「このままで終わらせてたまるか！」

握り拳の側面で、黙って睨みつけていた窓を力いっぱい叩く夾。

「……そうなのよっ トールは僕達で助けるの！ ……きつとまた笑ってくれるのよっ」

紅葉の精一杯の笑顔に、花島も静かに微笑みを返す。

「……で？ まだ先なのか？ あのクソガキのご本体様の居場所ってのは」

魚谷が乗り出したまま今度は春を見る。

「ん……もう少し先………のように、思われマス………」

「なんつーか………全力でぶん殴りたくなる位超曖昧だな………」

「いてて………魚谷サン………、もう殴ってるから………すでに」

「本当に後少しだよ。本家が見えてきたら、その裏になるから」

前方を睨むように見ながら、代わりに由希が口を開いた。

「あの子供の帰る所っていったら、その桜の元しかないと思う。きつと本田さんもそこに居るはずだよ」

「……けれど わたし達が行って………本当にどうにかなるものなのかしら………」

「してみせるんだよ」

「……成らぬは人の なさぬなりけり………」

夾の即答、春の呟きに微笑すると、咲は改めて透を見る。

「そうね………必ず」

「しかし………あいつらは大丈夫なのかな？」

「あ？ あいつら？」

「紫呉とはとり」

「……ああ……先生達はなんでも、本家に真つ直ぐ寄ってからこつちに向かうとかなんとか……」

「どういう事？」

「この車には定員オーバーだろ？ だからおっさん等、一足先に出発したんだ。……なんでも桜のことを調べるだのどつので。別れる際に本家とやらに迎えの車呼び出してたぞ？」

「ふうん……大丈夫なのかな……紫呉はともかくはとりは……」

「タツノオトシゴ……」

「なんとかかなんだろ……向こうもかなりガードも甘くなってるだろうし」

由希の呟きに、曖昧に夾が答える。

「心配するべきはむしろ物書きの方だと思ったけど……はとりさん、実は運痴か？」

真顔で問う魚谷に吹き出しそうになりながらも由希は苦笑した。

「ああ……ちょっとね……」

（いめんはとり……）

「……」

助手席で突然、うめき声を上げる透。

「透君!?!」

「トール! 気づいたの!?!」

「そんなはずはないわ……これは……」

「なんだよ花島!?!」

「これはおそらく……魂の方に体が連動しているのね……」

「どういう事だ?」

「まだこの体は完全には魂とは切れていないもの……完全に切れる事……それはすなわち死を意味することだから……」

「ふうあ……っ」

「透!」

「本田さんっ」

その青白い額から吹き出た汗をハンカチで拭いながら、花島はポツリと呟いた。

「……急がないと……。むりやり体と切り離そうとしているんだわ……透君を」

2

透は桜に囲まれた道を一人裸足で歩いていた。

辺りは真っ暗で。見上げれば吸い込まれてしまいそうな闇。しかし、気づけば足元に続いていった道ですらもいつの間にか闇に紛れて見えなくなってしまうた。

黒い景色の中、ただ桜の薄桃色が静かに舞い散る。雪のようだ。

透はただ一心に歩き続けていた。

奥へ奥へと。

進むほどに、自分はそのへ行かなきゃいけない。そんな気がしてたまらなかった。

やがて桜の木々が開け、闇が一気に膨張する。

どこが上なのか、下なのか。左右ですらもわからなくなるような、深い闇。

その奥には

一人の痩せた女性が立っていた。

青白く光る細い体、その表情は見えないが、なんとなく。なんとなくではあるが。

見覚えが、あった。

その容姿にも。

その短い金髪にも。

その雰囲気も。

……真つ先に、自分の感覚を疑った。

あるはずのない事。どれだけ願おうとも決して叶う事のない事。なかった事。

呆然と、しながら。

それでも透は、確かめる声を上げずには居られなかった。

「あなたは……誰……ですか……？」

瞬間。

女性はその顔を上げる。

『透……』

「……っ」

自分と呼ぶその懐かしい声に、透の瞳が大きく見開かれる。

『透……』

目の前の状況の全てを受け止めきれず。  
混乱で、完全に思考が止まって。

それでも、透はなんとか一言を絞り出す。

「お……かぁ、さ……？」

自分の声に。

頷いて 嬉しそうに。  
ふわりと微笑む。

ゆっくりと、  
その両手を広げて

「……………っ　　っおかあさん……………っ！！！」

言葉の代わりに 熱いものが奥からこみ上げて。  
止めどなく溢れて。

その顔が よく見えない。

そちらへ駆け寄ろうとしても、  
足が纏れて、思うように動けない。

体が痺れてしまったかのように、思うように動かせない。  
感覚がない。  
くもどかしい。

それでも這い上がって、なんとか今日子との距離を縮めようとする。

早く。

早く。

急がなくては。

早く。

だって。

夢の中で会う母は

すぐに 消えてしまうから。

( いかないで……！！ )

救いを求めるかのように差し出した 震える両手を。  
歩み寄った今日子が、しっかりと  
包み込んだ。

「 あさん……！！ 」

膝で立って、倒れこむように抱きついて、  
しがみついて  
思ったよりも随分と細い、腹の辺りに顔を埋めて、  
透はただ、声を上げて泣き続けた。

頭上に降る

懐かしい感触。

子供の時の あ頃のように。

母は優しく 頭を撫でる。

透を見下ろすその瞳は

氷のように、冷たい色を放っていた。

> i 6 5 3 5 | 1 0 5 2 <

3

「けど、一緒に居たのがはーさんで本当、良かったよねえ」

「……………」

「もしさっきみたいなの狂った女性に抱きつかれようもんなら、手っ取り早く、その場で記憶を隠蔽しちゃえばいいんだからさあ。……に、しても、本当に驚いたよ」

「……………」

「まさか、運転手が操られて助手席に座ってたこの僕に襲い掛かってくるなんてさ。しかも。相手は見た目麗しい女性と来た」

「……………」

「けど、もし助手席に座ったのが僕じゃなくてはーさんだったら、今頃別の意味で危うくなってたところだけどねえ？ こんな状況下、はーさんが元に戻るのをのんびり待つ、なんて考えられないし」

「……………おまえが自ら進んで助手席に乗り込んだのは、最初から運転手が女性である事に気づいていたからこそ、だろ……………」

「あれ？ バレてた？」

「……手伝いをしに来たのか？ 邪魔しに来たのか？ 前者だと言  
い張るつもりならさっさと手を動かせ、紫呉。」

「なんなら、今すぐ外に放り出してやったっていいんだぞ」

「うわおう。はーさん恐あゝい」

草摩の広い敷地内の奥。

真つ暗な蔵の中で、男二人の声が響く。

湿気と埃臭さ。独特の重苦しい雰囲気漂う静かな中とは対照的  
に、耳障りな喚き声や、耳を劈く騒音が、その外を囲っていた。

うめき声。

破壊だけを目的とした、力任せに壁を殴りつける、乱暴な音。

迎えの車に乗り込んだはとりと紫呉は、突然の運転手の変貌にし  
かし冷静に対処する。

彼女の気を失わせ後部座席に放りこむと同時に、はとりが運転を  
変わり、こうして危なげなく本家まで辿りついた。

が、変貌はもちろん運転手だけではすまなかった。

草摩の敷地内 外で暮らす人間のそのほとんどが、一斉に紫呉  
たちに向かってきたからたまらない。

隠れ隠れ進み、なんとか蔵の前まで辿りついた紫呉たちは、中に  
入るとすぐさま内側から鍵をかけた。

それでも。心を奪われたゾンビのような大群は、紫呉等の気配を  
追って次第に蔵の周りに集い始める

今、この瞬間も。

「しっかし……いくらなんでも、裏山の桜についての記載なんて草

摩の蔵にあるんですかねえ……?」

言いながら棚から資料を引っ張り出す紫呉。

外の喧騒などまるで気にも留めずに、顔をしかめつつ、舞い散る埃を手で払う。

同じく、黙々と資料に目を走らせていたはとりは、体勢を崩さずに一言紫呉に言い放った。

「わからん」

「はーさあん……」

「が、聞いたことがある」

「へ?」

「桜の噂と平行して、別の噂があったらどう?」

「別の噂ねえ……はて?」

「……(ため息)。『神隠しには、草摩の者が関わっている』」

「…本当なの? それ」

「嘘を言っただろう。おまえこそ本家で暮らしておいて今まで一度も耳にした事はないのか?」

あの頃は春が来ると、聞きたくなくとも耳に入ってくる位使用人等が騒いでいた。むしろ逆におまえのような、噂を知らないと言う存在自体が俺には信じられないんだが」

「僕、大して興味のない事はすぐに頭から消失するように出来ちゃってるからさあ」

「つくづく幸せな奴だな……」

「あはは。褒めてないってそれ」。

「けど、信憑性あるの? それ。単なる噂話なんですよ?」

「火のない所に煙は立たない。逆も然り、だ」

「要するに。時間かけても調べてみる価値はあるって、そう言いた

いの？」

「……もつとも、他に何の手がかりもないんじゃ、微かに漂う煙を追うより他に術はないだろ？」

「まあね。……けど。外はこんな大騒ぎしてるのに、慥人さんが何も言ってこないのは不思議じゃない？」

「見た所、どうやら操られている者の中に『中の人間』や十二支はいないらしい。……慥人が表へ出る理由はどこにも無い。それに……」

「なんだい？」

「病気になるのが、慥人の特技だからな……」

「……まあた寝込んでるのね……。しかし都合がいいというかなんと言いますか」

4

「アレが……そうなんだ……」

草摩の敷地の、丁度裏に位置する山の中腹に車を止めた一同。

外に降り立てば、刺す様に冷たい空気をすり抜け、やけに生暖かな風が頬を撫でる。

それぞれが仰ぐのは、月はおるか星一つさえ出ていない夜の闇に浮かび上がった、微かに見える赤の色。

「赤い……桜か……」

「ねえー。確かしーちゃん、『一週間前に切り倒された』って言うてなかった？」

「ここまで非常識な事が巻き起こってんだ……切り倒されたはずの

桜が復活してたからって今更もう不思議にも思わねえよ」

魚谷が吐き捨てるように言つとその横で春も頷く。

「なんでもアリ……」

「おい……そついやあなんか、ゾンビみてえな奴等、いなくねえか？」

夾が辺りを警戒しながら声を上げた。

「本拠地だから『人』なんか使わなくても十分だつて言いたいんじゃないか？」

「もしくは……俺たちを逆に招待したいのか」

「あ？ どういう事だよクソ由希……？」

「……さあな。なんとなく、そついう感じがしただけだ」

「『なんとなく』で知つたような面して物言つてんなよな……」  
「ったく」

「だからさつきも忠告してやっただろ。おまえもちよつとは頭使つてみるよ。幾ら馬鹿だからって限度があるだろ？ その内蜘蛛の巣が張るぞ」

「ソンだと？ もういつペンぬかしてみやがれくら……っ」

「あなたたち……急いで頂戴」

凜とした声に振り返ると、助手席に座つたままの咲が、抱きかかえた透の額に流れる汗を、黒いハンカチで拭いている所だった。

「どんどん……体が冷たくなってきているの……このままだと、透君……」

その声に一同、開けっ放しの助手席のドアから透の顔を覗き込む。  
汗をかき、眉間に深く皺を寄せ、  
先ほどよりも荒い息を繰り返している。

いつもの赤みがかった頬がこげ、  
柔らかく微笑む薄いピンク色の唇が、鮮やかさを失い青白く変化  
していた。

惜しむ事なく笑顔を降らす彼女が今ではもう、見る影も無い。  
ほんの少し見ぬ間に、透の体は無残なまでに変わり果ててしまっ  
ていた。

「トール……」

名を呟くと紅葉は、そつと左手の甲で透に触れてみた。  
その頬の、なんと冷たい事か。

初めて直面した恐怖に……言いようのない絶望に、思わず呆然と  
立ちすくむ。

その変化をずっと感じていながら取り乱さずに耐えていた咲に至  
っては、……もうボロボロだろう。

それなのに気丈に……普通に振舞えたのは、単に彼女の精神面が  
人並みはずれて強いが故。

『……わたしは……例えば透君が死んでしまったら私は……』

同じように一年後 笑えるかしら……』

いつかの彼女の言葉を思い出し、魚谷はただただ、咲の肩を軽く叩いた。

「大丈夫だ。こんなことくらいで、こいつが負けるかよ」

「そうね……」

咲は弱々しい、だが精一杯の微笑みを返す。

「……透君は がんばったものね……」

「 行こう」

「あ ちょい待ち由希……」

行きかけた一同に、後ろから春が声をかける。

「割り振り決めとこう……」

「割り振り？」

「畏臭い……コレ……」

「コレって？」

「由希達が言ってた……『人』が居ない事。俺も気になってた……  
……闇雲に全員で突っかかっていっても、最悪状況が悪化すると  
思っ」

「見かけより冴えてんなーおまえ」

魚谷が感心したように撥春を仰いだ。

「畏……か。それもそうだな……」

春に言われてふと考え込む由希。

薄々と、気づいてはいたのに。

そう言われるまで、考えもしなかった事。  
考えられなかった事。

（焦ってる……んだろうな……。俺……）

咲の上で眠る透を見つめ、由希はゆっくりと息を吐いた。

（冷静にならなくちゃ……もっと）

その必要がある。

自分の出来る限りをもって。

彼女を救う。

「〜おら、モタモタしてんな 先行くからな!？」

聞こえてくる夾の罵声をあえて無視し、由希は周りの顔を見渡し

た。

「どうやら二手に分かれた方が良さそうだな……」

「どうすんだ？ 王子」

一息つくくと、由希はなるべくゆっくり話すように意識しながら声を上げた。

「あの桜の木には、俺と夾とで行ってくる。」

春と紅葉はここで魚谷さん達を守ってくれないか？ もしかしたらまた、奴等が襲ってくるとも限らないし」

「了解……」

「ja！ わかったの、ユキ」

『うって、ちょっと待てよ！』

と、そこで由希の予想通り、二つの声が全く同時に上がる。

「なんでてめえがついてくんだよ！？ 二手に別れるつもりなら、あのガキの方は俺一人で十分だ！」

「あたしも行くぜ！？ あのガキんちょに一発かましてやらねえと気がすまないのは、おまえらだけじゃない！」

「だから、最初っから言ってるだろ。 おまえに行かせたら話も出  
来ないだろ……」

「ここまでかまされて 話し合う必要なんざあるか！」

「おまえの言う通り話が通じなかったら、……少しでも、人手が多い方がいいだろ？」

深いため息をつく。後の反論には取りつがず、今度は魚谷の方を向き直った。

「……魚谷さん達が、本田さんを大事に思ってるのは十分にわかってるつもりだよ。ここに居る誰よりも助けたいと思ってる事も。」

「……」

「……」

「ひょっとしたら、アイツの言うように話し合っても解決出来ないのかもしれない。」

「それに……」

本田さんが目を覚ました時に、もし、魚谷さん達に何かあったら……悲しむと思うんだ。だから……」

「だから？」

「ここに残って、本田さんの事、呼び続けて欲しい」

「……」

しばらく沈黙が辺りを支配する。

さすがの夾も、黙って二人の様子を窺っていた。

刺すような視線を由希に投げかけていた魚谷は、由希の真摯な視線を受け止めてフツと笑みをこぼした。

「……素直に足手まといだったつってもよかったんだぜ？ 王子」

「ええ？ い、いや、そんなつもりは全然……！」

慌てた由希の様子に苦笑する魚谷。

「……わあ、あったよ。おまえらに任せた」

「……………」

「魚谷さん……ありがとう」

「おまえら、しっかりやれよ。さっきみたく負けたら容赦しねえからな!？」

「……………うん。約束する」

「てめえに言われるまでもねえよ」

「二人とも、頑張つてなの!」

「頼んだわね……………」

相槌を打ちながら由希は、もう一度春を見る。

「万が一、……………日の出前に俺達がもし戻ってこなかったら……………その時は、春。任せたからな……………」

春が頷くのをしっかりと見届けてから。

由希と夾は桜へと続く闇の道に向き直った。

「夾…………………………由希」

「ンだよ? 春」

「?」

振り返ると闇の中、春が神妙な顔をして二人を見ていた。

「気をつけて……………」

「本当……なのですか？ お母さん……」

瞳を見開いて、母、今日子の笑顔を見上げる透。

「本当にこれからはお母さんと一緒に居られる……ですか……？」  
「……ああ」

背に、優しく回された母の両腕が、もう一度強く透を抱きしめる。

「……もうずっと一緒。離れないよ」

倅せに満たされて

喜びで、胸が詰る。

「お母さん……っ」

透は再び、母の温もりを確かめる。

「色々と苦勞かけちゃったね……でも、これからは」

胸に顔を埋めた透の頭を、今日子の温かい手が優しく撫でる。

「透はもう、何も心配しなくていいんだよ」

嬉しくて、嬉しくて。  
信じられない程。

怖い位に 嬉し過ぎて。  
いっぱい。

もう何もいらぬ。

欲しくない。

何も、考えたくない。  
考えられない。

「……」

と。

唐突に。

透の乳白色に包まれた頭の中を、微かに。

だが、確かに。

自分を呼ぶ、たくさんの声が、響いた。

「……っ」

それは、とても、  
聞き取れない程、とても小さな声だったが。

水面に広がる波紋の様に。  
透の中を、伝う。

静かな、衝撃。

「そうでした！ お母さんには是非お会いしてほしい方々がいら  
っしゃるのですよ……っ」

透の声に、今日子の身体は一瞬硬直する。

(ナンド……)

ぱっと顔を上げた透の笑顔に、しかし今日子は無表情だった。

(ナンデ……コイツ……忘れナイ?)

「おかあ……さん……?」

不審に思い、透がその頬へ片手を伸ばす。

伸ばされた手。

届く前に、今日子は右手でその小さな手を取った。

力を入れて、ぎゅっと握り返す。

痛みが走り、透が一瞬顔を顰めた。

それでも今日子は止めはしない。

「……っ　おかあさん……?」

自分を見下ろす無の瞳に戸惑い、見上げる事しか出来ない透。

「……どうした、ですか……?」

爪を立てて、小さな手を握り締めたまましばらくして、  
今日子はようやく口を開いた。

「忘れなさい」

「え……………」

「その人たちの事は全て忘れなさい」  
「…そんな…………、どうし、て…………？」

静かに。左腕を伸ばし、

今日子は、透を抱く。

「…………透が、お母さんと一緒に居ることを望むのであれば、その代  
償に捨てなきゃならないモノもあるんだよ」

「…………すて、る……………」

「ああ……………ずっとお母さんと一緒に居たいのなら、透は思い出を  
全て捨てる必要があるんだ」

「おもいでを……………」

「捨てれば、もうずっとお母さんと一緒に居られるんだよ」

「……………」

「何もかも捨てて、お母さんと一緒に来るかい？ 透……」

「……………」

「……わたしも、透と一緒に居たいんだ」

「……おかあさん」

「 独りは……もう」

「……………」

いつの間にか

片手に響いていた痛みは消え、

自分の手を包んでいるはずの、大きなその手は。

「……………」

自分に縋っているかのような、印象を受けた。

救いを  
求めるかのように

「……泣いてる、ですか……?」

「……っ」

「怖い……ですか?」

あなたは……

瞬間。

「……あうっ」

今日子は、透の細い首に両手を回し、締め上げる。

「くかってたまるか……っ」

声に瞳を開け、捕らえた今日子の姿に、

「くお、かぁ……っ」

ダブって見える、まだ幼い子供の影。

「……っ！」

現実という、奈落の底に、  
まっ逆さまに落ちてゆく、そんな絶望が透を襲った。

引き戻される。 ……その落差に、

思わず眩む。

『おまえなんか……わかってたまるか……っ』

「……かりません……っ」

『……っ』

「わかりません……っ！」

強い口調で、

全身全霊で、透が叫ぶ。

現実を、

一瞬でも、底だと感じてしまった。

弱い自分を、

責めるかのように。

青い表情の『今日子』は、声にビクッと体を震わせ、両の手の力を緩めた。

地に手をつき、咳き込む透を、『今日子』は呆然と見下ろしている。

……やがて、

透の脳裏に甦る。

ほっとけ……っ

吐き捨てるように呟いた、いつかの夾の背中

「おっしゃってくださらないと……っ」

……大丈夫

あの日の由希の、感情を押し殺してまで自分に向けた笑顔

「……お一人で……抱え込んだままでは……っ」

そして

会いにいきたい

もう

会えない

あの、泣き顔

笑顔

「わからないです……っ」

滲んだ視界にある両手に力を込め、地の土を握り締める。

どうすればいいのか  
どうしたら、

何を、すれば……、

あなたは

笑って、くれますか……？

「トオ……」  
「……あ駄目です……っ」

『今日子』の声を遮って、

「思い出は……、それが、どんなに痛くても……」

一言、一言、

自分に言い聞かせるように、

透は蹲って泣いた。

「捨ててしまっは……」駄目なんです……っ」

だって、

それは、証であるから。

6

延々と続くかのような、幻想的な風景  
が、数ヶ月前なら広がっていたのであろう。

花も葉もつけぬ、裸の桜の木々が並ぶ道を、二人　いや、二匹は全速力で走っていた。

その後ろから、信じられない程早いスピードで追いかけてくる人でないモノの群れ。

「誰だ!!　ゾンビ共がいなんてぬかしやがったのは!？」

いつの間に変身したのか、自身にもわかっていないだろう。

大群に何度も捕まりそうになりながら、二人……もとい二匹は懸命に目的の場所を目指していた。

まあ、変身した結果、足が速くなり捕まりにくくなったのは怪我の巧妙か。

「今はそんな事言ってる場合じゃないだろ」

「うっせ!!　偉そうな口叩く余裕あんなら今すぐ降りててめえで走りやがれ!　人の頭に許可無く乗っかかりやがって……っ」

「仕方ないだろ。この体格じゃスピードが出ない」

「開き直るな!!」

「夾……!　前向け。見えてきた」

由希の声に敏感に反応し、前方を睨む夾。

「って、なんだあの異様に薄い赤桜は……?」

「後ろの景色が透けてるな……」

近づくにつれ、その半透明の赤桜は太い切り株の上に成り立っている、という事が解る。

「……あれが、紫呉の言っていた切り株か」

言っ、由希はその切り株の横に、小さな木が生えているのに気づいた。

「おい夾……あれ……」

「おい！ あの偽桜に飛び込むぞ！？」

「……なんだって？」

「ここで止まってもアイツラに捕まるだけだろうがっ 他に何も無いのならそうするしかねえだろ！？」

「だからって、自ら懐に飛び込まなくてもいいだろ？！ 春も言っただように、コレは明らかに罠……っ」

「虎穴に入らずば虎兇を得ず！ ……どっちにしろ選択の余地なんざねえだろがっ」

「単純馬鹿……」

「馬鹿って言うなっ！ ンじゃ行くぞ……！」

叫んで、夾は飛び上がる。

その幻影の桜に向かって。

体が、その鮮やかな赤に触れた瞬間、  
二人の視界は暗転した。

7

「……と……っ」

真っ暗な空間に放り出されるも、なんとか体勢を整え着地する由希。

と、その違和感に首を傾げた。

「…………元に戻ってる…………？」

自分の両手両足、何も着けていない体を凝視する由希。どう考えたって、変身が解けるには早過ぎる時間だ。

そこまで考えて、ふと思考を中断する。

夾の姿が見えない。

「おい…………夾?!」

最初は暗闇の中に倒れてるのではないかと、地に向かって声を上げる。

否、違う。

気配すらない。

「…………どこだここは…………」

何も聞こえない。

自分と闇以外の何も無い。

自分自身の存在さえも……感覚でさえ段々と霞んでしまっかのよ  
うな。

無の空間。

「き……」

俯いていた顔を上げる。

いつの間にか。

自分の前方に、淡い光が在った。

闇に慣れた由希の目に、ソレは眩し過ぎて、すぐには認識出来な  
い。

「……由希……」

瞳を凝らして、ソレを見た。

白い足先がこちらに近寄ってくる。

長い髪がさらりと揺れた。

「ほんだ……さん……?」

瞬間、

ソレは一気に由希に近づいてきた。

「由希」

その姿に、その顔に。

由希は思わず目を見開く。

「かあ……さん……?」

気づけば、由希の身体はいつの間にか小さくなって、手足が縮んでしまっていた。

小さい頃よく着ていた、見に覚えのある服を纏っている。

「慥人さんの所へは、もう行かなくてもいいわよ」

母親が、

「あそこが嫌なんでしょう?」

自分に向かってゆっくりと、両手を広げる。

「好きなだけ、わたしの近くにいればいいわ」

「母さん……」

大きな、

温かくて、柔らかな母の体が、

「コレを、望んでいるんでしょう?」

小さな由希を包み込んだ。

「母、さん……」

子供の姿の夾は、暗闇の中、母親と向き直っていた。

「夾……」

これは一体、

「……っ」

なんの冗談か

「もう、何も心配しなくてもいいのよ……」

酷く頭がボヤけて、

思考すら霞んでしまっただまならない。

「……」

疑問も、込み上げてくる吐き気ですらも、真白にかき消されてしまっ。

「わたしは……」

抵抗のために要する負の感情は、何一つさえ抱くことを許されずに、  
視界に押し付けられる映像をそのままに、全てを

「わたしは……ずっと傍にいるわ」

受け入れてしまっ。

奥底に眠っていた、子供の頃の小さな自分を驚掴まれて、  
無理やり体から 外郭から裸のまま、引きずり出されたような  
感覚を覚える。

自分の、最も弱いところを晒され、  
撫でられる。  
その、異様な心地よっ。

「……」

弱さを守るための、意地もプライドもまだ持たなかった、  
……あの頃と

「一緒に生きましょう……夾」

子供の頃と、同じように。

「あなたが……それを望んでいるんですもの」

ゆつくりと、  
自分に向かって差し伸べられる白い手を。

……あの頃、  
心底から求めた、その大きな 暖かな存在を。

「うるせえ!!」

夾は振り払った。

その場に倒れる彼女の姿を夾は瞳を見開いたまま、荒い息遣いで見下ろしている。

「夾……っ どうして……、」

「こんなもの……俺は……！」

欲しかったのは

「くいらない……っ」

声にならない声を搾り出し、

由希は、母親を振り払った自身の震える手を見つめていた。

確かめるように、  
固く、握る。

「俺は……もう」

あの頃、ずっと欲しがっていたものは

「いらないよ……俺は、もう……っ」

存在しないモノ。

「あの頃の、ままじゃないんだ……っ！」

……それは、

どんなに縋っても望んでも、手には入らなかったもの。  
もう二度と

この手に入らないもの。

本当は もうずっと前から知っていた。  
判っていた。

解っていた、はずなのに……

……あの頃の自分が、馬鹿みたいに。  
一体何を望んでいたのか

蓋をしたまま、やがて霞んでしまった小さな『想い』を、ゆっく  
りと

思い出させてくれた、人が居る。

そこにはただ、絶望だけが残っていて。

願いは、祈る程に痛くて、

痛くて。いつしか、蹲ってしまっていた。

……あの時秘めた、叫び。

かき消してきたモノ。

見えなくなってしまうた光を。

小さな声を、

……もう一度。

救い上げて

ただ、微笑んでくれた。

いつだって、聞いてくれた。

傍に

居てくれた

古い傷跡カサブタにさえ沁みてくる

そんな優しさの欠片と共に、

「貴女」の代わりに、もう一度……俺に降らしてくれた人がいる  
から。

『そう……もう、いいの…… ……残念』  
『折角、痛い想いをせずにすんだというのに……』

二人の母親が、二人の目の前で突然光った。

「……………」  
「なに、を……………」

たまらず両腕を顔前に上げ、光を遮ろうとする二人。

固く目を閉じても飛び込んでくる光が、やがて徐々に効力を失うのを感じて、

二人は恐る恐る目を開けた。

「由希……………っ?! おまえいつからここに……………」  
「夾……………?! ……母さんは……………?!」

今まで母親が居た所に立っていた互いの姿に驚き、目を見張る二人。

「元に戻ってら……………」

両手を見、振りながら夾が不思議そうに呟いた。

すでに二人は子供の姿では無く、ここに来た時の姿に戻っていた。

「本当だ……」

「……」

「母親が……居たのか……？」

夾の問いに由希はコクリと頷く。

「……幻影、だったのかも、しれない……」

「……幻影だ？」

『「名答」』

闇の奥から、よく通る甲高い声が響いた。

聞き覚えのある、子供の声。

## chapter 5

1

『……まさか、3人が3人も引つ掛らなかつたなんてね……少し驚いたよ』

四方八方探しても、姿が見当たらない。

「くてめえ……っ 姿現しやがれ！ 卑怯臭エ……っ」

「キミがやってたの！？ どうして……！」

なす術もなく、闇の奥に叫ぶ由希と夾。

『……どうして？ 決まってるじゃない』

やがて、先程と同じ様な淡い光が、深い闇にポツンと浮かんだ。

光は徐々に人を形成し、

その赤く大きな瞳を開く。

瞬間、光は、よく見知った少女の形となった。

たった今、誰よりも強く、自分の中に感じた女性の姿に。

「く本田さん……！？」

「とお……っ！？」

目の前の少女は、由希と夾の姿をその赤い瞳に映すなり、  
ゆっくりと、しかしどこかぎこちない微笑を浮かべた。

まるで、

からくり人形のような。

『邪魔だからだよ……』

そう一言告げると、

少女はそのまま、さもおかしそうに笑う。

「透……じゃ、ないんだな……！」

「本田さんに何を……！？」

『僕には元々、形なんて無いから。どんな形にもなれるし、人間の  
魂と混ざり合って操る事だって出来るんだ』

目の前で歪に笑う透の口から、

無限に広がる闇の中から、

子供の声が、幾重にも重なって響いてくる。

『ただ、その為には触れなくちゃならない

おまえ達の母親だってそうだ

おまえ達の記憶の中の「母親」に触れて、僕の力で幻影化させて、僕が操ってたのさ

こっやって……中に入り込んでね」

言っや否や、

透の体 魂から、淡い赤を放つ発光体が出てきた。

「その光ってんのがてめえの本体って訳か……」

「じゃあまさか、最初の子供の姿は……っ」

『ご名答。れっきとした人間のものだよ

……大分昔に体から抜き取った、行き場のない魂を操ってただけだよ』

「そのガキはどうしたんだ！ どこへやった!？」

『その子の自我？ 壊れちゃった』

「壊れ……?!」

『僕の操る力に耐えられなかったみたいだね』

辺りの「声」がさも愉快そうに笑うと、

発光体は再び透の中へ入っていく。

『「トオル」も、あとどれ位もつのかな？

大分衰弱してたみたいだけど』

「〜てめ……っ！！」

「どうして」

感情を無理やり押さえつけて、

夾の言葉を遮って、至極冷静な声を上げる由希。

「どうして、キミはこんなことをしているの？」

『決まってるだろ？ ねえさまのためだよ』

由希の心情を知ってか知らずか、

声はくすくすと笑いながら、それに答えた。

2

『ねえさまは、それはそれは人間思いだった  
疲れ果てて生きる気力の無い人間に、最期にいい夢をみせてあげ  
てたんだ』

「夢だ？」

『そうだよ』

終わりの無い永遠を約束された倅せ』

「ソレは一体……？」

『ねえさまには特別な力があつた。』

……おまえがさつき言つてた通り、幻影能力つて力だ。

人間の魂を獲り、それに直に触れ、  
望みを吸い続けることで、その人間の叶えられなかった理想や希望の世界を、幻影として創り出すことが出来る。

僕の手つてるこの力は、ねえさまの力が少しだけ移つたつて位の話。世界を創り上げてしまふねえさまの方がもっと凄かつた』

「幻影を……望む世界を創る……？」

「それじゃあ……神隠しつて……っ」

『下らないモノを吸い取つて吸い取つて、  
吸い取り続けた故に、ねえさまの体は急激に大きくなつた。』

自分の体に獲り込んだソレ等に幻影を見せれば見せる程に、毎年春になるとねえさまは綺麗な赤い花びらを身に纏つたんだ。

……とても

綺麗だつた』

「……」

『 …… けど、数年前。』

ねえさまに立て付いた人間がいたんだ……』

……それが、

その事こそが、その瞳に、憎悪という色を宿らせた原因なのだという事に、

由希も、夾ですら気づいた。

『その女はねえさまをたぶらかして、ねえさまを……っ

すっかり、変えてしまった……

それつきり、ねえさまは人間を獲り込まなくなってしまった』

明らかに様子が違うからだ。

「ネエサマ」の事を自慢気に話していた瞳と、

『「人」は、最高の栄養なんだ

大木の身を、それまで人の養分で保っていて、……でも、もう老木だったねえさまは

……もう土の中の養分だけじゃ、生きていけない身体になっていったんだ……

……日に日に痩せ細っていく身体を支える事でさえ、十分辛かったはずなのに

それでも、ねえさまは毎年花をつけて  
あの人間を、待ってた

……2、3年前から、あの女が来なくなつて……

僕はもう、人間なんかを信じて待つのはよせていったのに……』

今の、

深い悲しみの色をした、赤い瞳が。

『……僕は、何度も何度も叫んだのに

ねえさまは……毎年花をつけてあの人間      キョーコをいつまで  
も待ってた』

その強大な悲しみは、

『人間の手で殺される、その日まで』

幼い心を捻じ曲げてしまつには、十分過ぎるものだった。

『…なんでだ！

ねえさまは……ねえさまは、ただ、人間に夢を見せたかっただけなのに……っ』

「それが、余計な世話だっつつんだろっが……っ」

「夾っ！」

『っっ

人間は……いつも辛そうにしてるじゃないか……！』

「……っ」

「キミは……」

悲しみに捻じ曲げられてしまった赤い瞳が、

『いつも思ってるだろうがっ　く死んだ方がマシだとか……！』

全身で訴えながら

雫を、零す。  
それは、

「おまえ……」

その感情は　なんて、  
人間らしいのだろう。

『ねえさまが夢を見せるのはそんな人間達だけだっ  
勝手に死にたがってる人間に、楽しい夢を見せてやりたかっただ  
けだっ』

生きてる時には死んだ目をしていた人間も、ねえさまが見せる夢  
の中ではあんなに喜んでた……っ

くなのに……っ』

次の瞬間、

『おまえだっつてそうだ……っ』

無表情の透の指は  
例のぎこちない動きで、真っ直ぐに夾を指す。

「くお、おまえに何が……っ」  
『記憶に触れる事が出来る僕等には、わかるんだよっ』

「く……っ」

『そっちのおまえだっ』  
『この女だっ』

『泣いてる』

『笑っていても、怒っていてもいつも』

『泣いてるじゃないか』

『幻影見せるのだっ』結構な養分が必要になるんだ……っ  
くねえさまはっ

……人の為に生きて頑張っ……  
くなのになんで人に殺されなきゃならないんだ!!

……まだ

『まだ生きてた……っ』

『くおまえ等だつて!!』

なんで、この女を庇う必要があるんだ……っ

……そんな余裕なんて、どこにも無いくせに』

重なり合つて響く、

行き場のなかった、もはや抑えられなくなってしまった感情。

やるせない悲しみに流れる雫。

軋む心の悲鳴と共に、

『自分ごとで……精一杯なくせに』

ゆっくりじゅ。

近づいてくる「透」。

二人は、何かの呪縛にかかったかのように微動だにせず。  
近づいてくる、その姿を見ていた。

『おまえらだつて……辛いんだろう？』

現実なんかよりも

眠って見てるだけの……夢の世界の方が、楽だろ？』

ついに、二人の目の前までやってきた「透」。

『見せてやるよ』

静かにゆっくりと、その細い腕を上げ

『おまえ達が焦がれた　この女の手で』

ゆっくりと伸びてきた「透」の指が、  
由希、夾の首にかかった。

3

「黙って聞いてりやあさ……」

喉を押さえられた夾が、ぼそつと呟く。

「……辛い辛いつて、さつきから」

「さつきから泣いてるのは、キミの方じゃないか……」

「透」の動きが止まる。

「楽な夢の中で生きさせてもらえんのは、そりゃあ楽しいだろうが  
な……」

それってなんつうか「

「なんだろう……なんとなく……悔しい、……んだ」

『……………』

「キミはどつなの？」

「与えられた都合のいい世界で、約束された倖せに笑いながら生きて」

「そこで、本当に、満足なの？」

「痛みも忘れられるぬるま湯の世界に逃げ込むだけで」

「本当に笑えるのかな……」

『わからないよ……』

『そんなの……そんなの、”僕”が知る訳ないじゃないかつ』

「……!」

「……ぐ……っ!」

叫ぶや否や、腕に力をこめ二人を黙らせる、透の形をした、心無きモノ。

ヒトではないモノ。

……なのに

さつきから

これは 一体

なんなんだろう。

溢れて、止まらない、温かい雫。

ポタポタと、後から後から  
滴り落ちて

由希と夾の顔に

降る

「く おまえ」に聞いてんだよ!!」  
「っ 夢の……中でもいいから、……それでも笑っていたいの  
?」

泣いて。

泣いて泣いて泣き叫んで

疲れて蹲っても

涙は尽きない

『僕は……』

例えば

このまま狂ってしまっても

誰かが助けしてくれる訳でも、  
何が変わるわけでもない

それでも

「今まで抱えてきたモノを、何もかも捨てて逃げ出して！！  
その覚めない幻想の中で、一生笑って暮らして、一体何が得られるんだ！」

『……うるさい』

「『理想』と思うふうに生きて、上っ面だけの世界で……それって  
本当に嬉しいかよ……っ？」

『くじろくせい……!』

それでも

「く俺はそんな事……っ!」  
「望んでねえ……っ!」

どうして人は

生きようとするのだろっ。

『くじろくせい……!くじろくせい……!くじろくせい……!』

おまえらなんか……、おまえらなんかに  
わかってたまるか……っ

わかってたまるか僕の気持ちなんか!』

(くやめてください……!)

唐突に

頭の中に響く、悲痛な声と共に、

強烈な圧迫感が、子供を襲う。

4

体が、

言う事をきかない。

由希と夾を締め上げていた腕が、

勝手に

静かに降りてゆく。

（～お願いです……もう、やめてください……っ）

『っ……っ』

やがて解放されて、  
力なく、その場に横たわる由希と夾の体。

『なんで……この魂の力なのか……？ どこにそんな力が残っ……』

(独りじゃありません……　　あなたは……っ)

必死に、  
響く、  
闇を引き裂いてしまう　声。

イタイ

(独りなんかじゃ、決してありません……っ)

痛い

『都合のいい事を言うなっ!!!』

たまらず、発光体は透の体を出る。

「うあ……っ」

支えていた力を無くし、  
由希と夾の傍に倒れこむ透。

「……っ」

突然襲った衝撃に、いきなり自由が戻ったその身に  
戸惑いながら それでもなんとか、顔を上げた透は瞬間、

ギクっとして

その瞳を見開く。

すぐ、眼前にある、

二人の  
蒼白の顔。

「……ゆ、由希……君っ　く夾君……っ」

名を呼んで必死に揺さぶるが、しかしその身体はピクリとも動かない。

『まだ生きてるよ　そいつら』

後ろから声が響く。

『おまえら……みんなでグルになって僕を言いくるめて鎮ませようだなんて、よくも卑怯な真似してくれるよね』

発光体は、淡々と言葉を発しながらゆっくりと透に近づいてくる。

『さすがは、キョーコの娘だよね……』

「そ、そんなつもりでは……っ  
く信じてくださいっ　本当に……っ」  
『あきれた……まだ続けようとしているの？』

……そんなに望んでるんだったら、先におまえから黙らせてやるよ……っ』

憎しみの色に染まってしまった 幼過ぎる魂。

そこに 確かに存在る

宿った、哀しみに埋もれてしまった心を。

見上げて、真っ向から受け止める透。

その瞳に帯びた光を消さずに、強い口調で遮った。

「〜聞こえませんか……っ!？」

『なに……っ?』

「あなたには……聞こえませんか？」

『……………』

「先ほどからずっと、」

ずっしずっしと……っ」

『……………』

「……呼んで……いらっしやるのですよ……?」

『……え……?』

透の涙声に導かれるようにして、

静まり返ったその場に、

その小さな小さな声は、確かに、辺りに響いた。

『……じゅ、めて……』

『……っ……』

『……ねがい……っ……う、う、やめて……』

『……おれか……』

その問いかけに応えるかのように。

『ねえさま……、なの……？』

透の胸元から、  
薄い薄い桃色の発光体が姿を表した。

『……そんな事をしてしまえば、あなたまで赤い花を身に纏う事になってしまう……』

『ねえ……さま……！？ ……どうして……っ』

薄く、

しかし温かな光に照らされて

透は、生命力が漲るのを感じていた。

「……この方は ずっと。  
あなたのコトを 呼んでいらしたのですよ……?」

透の言葉に、桃色の発光体はさらにその身体を一瞬だけ光らせる。

輝きに瞬く間に、光は髪の毛の長い女体の形をとっていた。

『あなたを思う、彼女の……』

透ちゃんの想いに 同調したの……』

驚きに戸惑う幼い発光体の目の前で  
柔らかな唇が。

総てを包み込むような、優しい声を紡ぐ。

『気づいてくれた透ちゃんが体の中で匿ってくれたおかげで この  
姿を保てるようになるまで、力が強くなったのね……』

そういつと、女性は透を振り返り、

柔らかく、微笑んだ。

『生きて、ただね……ねえさま……っ』

薄い桃色の光を纏う女性にゆっくりと近づくと、赤い発光体。

『……………』

肯定もせず、

否定もせず。

女性は、近づいてくる光を見つめていた。

やがて、光が手の届く距離まで来ると、  
女性は再び、口を開く。

『わたしはずっと あなたの側に居たわ……  
”わたし”があなたを止めなくちゃいけないから……。』

でも”わたし”には……」

『え……?』

『あなたを止める力が残っていなかった』

『ねえ……、さま……?』

『もう…… ”これ” が本当に最期の力……』

「そんな……」

『……透チヤン……ありがとう』

『そんな、ねえさま……っ そんなのっ てないよ!』

その悲痛な叫びは、  
抱えている、痛みは。

『どっやって生きていけばいいの!?!?』

これからずっと……ねえさまがないなんて、

くわからないよ……っっ』

鋭い刃となつて、

透の胸さえも、いとも容易に抉る。

『わからないよ……っ

寂しいよ……っ

馬鹿な人間達のおかげで……っ　　くそんなのってないよ……っ！  
『！』

深い深い、強大な、

孤独という名の闇に　押しつぶされ続けた痛み。

悲鳴という名の、涙。

『お願い……　聞いて頂戴』

その大きな傷　悲しみに表情を歪ませるも、

まるで、母親が子供を諭すように、優しく語り掛ける女性。

『わたし”が人に夢を見せ続けてきたのは、

なにも、人の事だけを思ってやっていた事じゃないの』

『……？』

『わたし”も……』

寂しかったの』

それは、  
思ってもみなかった言葉、  
なのだろう。

総ての時間が止まったかのように、  
発光体はしばらくの間、  
何も言わなかった。

「……………」

透は、胸の前で両手を組んで  
静かに、”二人”を見守る。

『……………ねえ……………さま？』

奥底から搾り出したような、霞れた声に、

女性は、ただ、  
コクリと頷いた。

『だから……これは自業自得なのよ』

『そんな……くそんなの違……』

『いいえ。違うわいわ。』

なぜなら ”わたし” も……、』

女性は、そう、何かを言いかけると

顔を上げて、虚空を見つめる。

『……………』

やがて、

静かに首を横に振った。

『……………？』

『……………なんでもない。遠い昔のことね……………』

「……………」

『今日子と……………それから透ちゃんが。』わたし”を救ってくれたの』

そう言って、女性はもう一度透を振り返る。

発光体 赤い子供も、

促されるように、こちらを眺めているかのような様子だった。

『だから、”わたし”はもう、寂しくない』

『ズルイよ……………そんなの』

『……………』

『……僕は……』

寂しいよ……………独りは嫌だよ……………っ』

「……………独りじゃ、ありませんですよ……………」

『え……………?』

『透ちゃんの言うとおりによ?』

『それってどういう……………』

『“わたし”の上に、“わたし”の身体を養分として、新しい命が芽吹いたの』

『……………本当、なの……………?』

『本当よ……………』

哀しさや寂しさで、視界が狭くなっていて気づけなかったのね……………』

言うど女性は、

震えている赤い発光体に近づいた。

『今度はあなたが、その子に教えてあげてね』

その、両手で触れて、

『あなたが いままで見てきたこと。

あなたが いままで触れてきたこと

……あなたが知っている、大切なこと。……たくさん』

優しく……救い上げる。

『……。

……ねえさま。ねえさまはいつてしまうの……？』

『……』

『ねえさまは、いろんなこと……教えてくれないの……？』

いろんな……人間達のこととか、空や山の話……海のお話とか……  
もう……

お話できないの……？』

『…………ええ』

『…………嫌だ』

嫌だよ…………そんなの…………

そんなの…………嫌だ…………っ

く嫌だ…………っ』

震える光を  
包み込むように優しく、  
女性は抱きしめた。

『 大丈夫』

あなたも もう

…………気づいているでしょっっっ』

「…………わたし」

声に振り返ると

「わたしも、僭越ながら 会いにいかせていただきますですっ」

笑顔で立っている、透の姿。

『トオル…………？』

赤い発光体は、小さく声を上げる。

無理やり魂を押さえつけられて、操られて  
立っている事ですら、辛いはずなのに……

「わたしのお友達は、みんな良い方達ばかりなのですっ きっと楽  
しいですよ」

『……………』

「お約束させていただきますっ」

軽くガッツポーズをしてみせる。

「それに今度はちゃんと……お母さんも連れて来ますね」

穏やかに微笑む透。

「お母さんも……それを望んでいるでしょうから……」

『トオルは……』

ぴったりとくっ付いていた女性から離れ、

『寂しくないの……？』

おずおずと

透の元へ

進む光。

『おかあさんがなくなって……それでも、寂しくないの……？』

「はい……っ」

笑顔を曇らせぬまま、透は即答した。

『……………』

「わたしの周りには 由希君や夾君や」

言葉を紡ぎながら、そっと瞳を閉じる。

「紫呉さんも、はとりさんも、撥春さんや紅葉さんも」

瞼で 遮っても

「それに魚ちゃんも花ちゃんも……」

例えば 光が届かない、  
闇の中に居たとしても

絶えず浮かんでくる、大切な人たち。

「たくさんみなさんがいらしてくださいますから……っ」

大切な人の

笑顔。

『……………』

「透」に触れ、

「由希」や、「夾」に触れた、

子供には わかる。

その真っ直ぐな言葉に  
偽りは 欠片も無いこと。

人の想いに何度も触れて、

いつしか自分の身にも宿してしまった、「心」というものに沁み  
わたって、

痛いほどに  
それが判る。

「それに……おかさんもいます。」「じ……、」の中じ……」

そつと

自分の胸に両手を当て、

「いつも……見守ってくださってます」

確かに灯る温かさを感じ

透は再び その大きな瞳を見開く。

「ずっと、一緒ですから」

微笑んで、顔を上げた。

「独りでは ありません」

強がりなんかじゃない。  
偽りでも、幻影でもない。

彼女の笑顔が咲く理由は、  
彼女の中の、揺ぎ無い真実。

大切な誰かの為に、在り得る自分。

悲しみも

痛みも

涙をも。

乗り越えようと その全てを力に変えて、  
懸命に、生きようとする意思。

たくさんの誰かの、  
笑顔を祈る。

それこそが、

彼女が立っている理由。

彼女の、力。

『トオルは……』

「え？」

『トオルは……凄いな……』

「うい、いえ、そんな…っ 滅相もございませんっ」

慌てて両手を顔の前で振る透。

「わたしが……凄くみえるのでしたらば、それは……」

視線を 由希と夾へずらすと

「……それは、みなさんのおかげなのです」

穏やかな笑みを浮かべる。

と、突然、

発光体は、最初の、小さな子どももの姿をとった。

「え……？」

瞬く間に

目の前に飛び込んできた子どもは、透の膝元に顔を埋める。

彼女の優しさ

彼女の強さ

その温かさを

全身で 感じる

「……あ、あの……？」

『じめん……』

「……………」

透を抱く腕に、子供は懇親の力を込めた。

『じめん、じめん……』

じめんなさい……っ

「ごめんね……っ！」

「……よいのですよ」

謝罪の言葉を、しかし柔らかく遮る音  
触れ合った体 心を伝い、全身に響くその声に、

子供は、涙に濡れた瞳を見開く。

その場にしゃがみ込んだ透。

自分を、縋るように抱きしめ、泣きじゃくる子供を、

心を持った、自分となんら変わり無い人間を。

「……お独りで泣かなくても」

優しく抱き返し、包み込んだ。

「まっ……」

……よいのです……」

許されて

子供は 今

初めて

声を上げて泣いた。

ただ 泣いた。

泣き続けた。

今までずっと 自分が見てきた

時に 羨ましく思えるほど屈託のない笑顔

を 素直な感情を見せる

人間のように。

微笑して、その頭を撫でる透。

そんな二人の様子を、女性は嬉しそうに眺めていた。

> i 6 5 3 6 | 1 0 5 2 2 <

## chapter 6

1

「一体どうなってんだこりゃ……?」

素っ頓狂な声を上げて。魚谷が後部座席のドアを開けた。

一台のセルシオの周りに、たくさんの人間が倒れている。

「いきなり豪快に倒れちゃったネー……」

「ドミノみてえだったよな……」

同じ様に反対側のドアを開けて出てきた紅葉が、すぐ足元でうつぶせに倒れていた人間を転がしてみる。

みんな、先程までは死んだゾンビのような顔をしていたのに。

なんとも倅せそうな顔で倒れているではないか。

「なんだコイツラ……気味悪イ」

同じくその辺に倒れていた中年男の顔を見た魚谷が、顔をしかめてその身体を蹴りうつ伏せに転がした。

「きつと、楽しい夢でも見てるのよ」

「……メデタシメデタシってやつ……?」

車の運転席には、両手を頭の後ろで組んだ撥春が倒したシートに

もたれかかっている。

助手席で、段々と良くなっていく透の顔色を覗きこんでいた咲が微笑んだ。

「そのようね……」

「って、おい、アレ見ろよ花島!!」

「すごいのー!!」

唐突に、外から二人の歓声が響き渡ってきた。

「どうしたのよありさ……」

車から身を乗り出し、魚谷たちの視線を辿った咲も同じ様に目を丸くする。

「あー……」

立ち上がって、ゆっくりと

まだ薄暗い、夜明けの空を仰いだ春が、ポツリとつぶやいた。

「祭ってカンジ……?」

花見のスポットとなっているその山にあった、たくさんの桜の木。

徐々に差し込む朝日の光に照らされたその全てが、満開の花を身に纏っていたのである。

「やあやあこれはこれは」  
「凄いな……」

その後ろから紫呉とはとりが感嘆の声を上げながらゆっくりと歩いて近寄ってきた。

「あら……草摩紫呉に草摩はとり……」

「あーハリー！ いつ来たの?!」

「今だ」

「先生……はよ」

「てか、来るのが遅えんだよ物書き！ こっちは寝ないで格闘してたんだぜ？」

「あははーごめんごめん。 てゆうか、僕等も同じ立場ではあるんですよ？ ねえ。はーさん？」

「おまえはしっかり寝てただろうが」

「……ギク」

「おまえのいびきは公害並だからな…… バレないはずがないだろう」

「ンなこつたろうと思ったぜ……」

「嘘はいけないわね……嘘は……」

「け、けど、今まで周りを取り囲まれてて身動きとれなかったっていうのも事実なんだよ〜!？」

浴びせられた非難の視線にたまらず紫呉が声を上げると、

「いきなり、その場に居た人間全員が倒れだしたんだ ……こんな風にな」

足元を見渡ししていたはとりがそれに付け加えた。

「で？ 一体何調べてたんだよ？」

「もちろん、纏血桜の事ですよ」

「あの桜が、神隠しの元という意味で『纏血桜』なんて名前で呼ばれるようになったのは、ある一人の女が原因らしい」

「女……？」

「ハリイ、ゲンインってどういうコト？ その人何かしたの？」

「自殺したんだそうさ。桜の木の枝に縄をくくりつけて。……もう随分昔の話らしいが」

「まあ……」

「その木が、今で言う纏血桜なんです。自殺の原因までははっきり残ってなかったんだけどね」

「丁度、女の自殺後から、この辺りで神隠しが続いたらしい。しかも、その翌年から桜は赤い花を纏うようになった。それが偶然なのか、本当に関連性があるのかはわからんが」

「で、益々有名になっちゃった桜を、誰が言いだしたか、血を好んで纏う桜 『纏血桜』と呼ぶようになったのですよ」

「そんなことが……」

「だけど先生……どうしてそんなコトが、草摩の蔵なんかに残されてたんだ……？」

ミステリーと呟く春。

「あ、それはですねえ……」

紫呉が、そう言いかけた時

助手席に座ったまま、話に耳だけを傾けていた咲の瞳が見開かれた。

「う……ん……っ」

重く閉じられていた透の瞳が 今

ゆっくりと 開かれていく。

「透……君……？」

「何？ 透だつて？」

「トール?! 起きたの?!」

「本田さん……はよ」

「おや。お姫様のお目覚めだねえ」

「本田君、大丈夫か？」

降る声に、完全に瞳を見開き  
ガバツと半身を起こした透。

見渡す限りの、みんなの嬉々とした顔、顔、顔……

「……こっ、は……」

ふと顔を上げると、涙で濡れた 咲の微笑があった。

「お帰りなさい……お帰りなさい……っ　く透君……」

最後の方は、もはや  
声にすら　ならなかった。

「……ただいまです……っ」

咲に抱きしめられた透は、照れくさそうに、だが、微笑みでみんなを照らす。

「……一件落着いてか？」

二人を見ていた魚谷が、鼻を睨りながらも満足そうに微笑む。

「あれえ？　でも」

「？　どうしたの？　もみっち？」

「由希と夾の姿がまだ見えない……」

「ああ！？　こ、こうしてはいられないのですっ」

春が総てを言い終わらぬ内に  
大声を上げて咲の膝から地へと、降り立つ透。  
大きくバランスを崩す。

「つて、大丈夫かよ？」

よろめくその体を、慌てて魚谷が支える。

「どうしたの？ ……透君」

「うあ、あの、……事情は後程説明させていただきますので……そのっ ちよっと……、  
うすぐ……っ 戻りますので……っ」

よほど慌てていたのか。

しどろもどろになりながらもなんとかそこまで言い終えると 透  
は、

すぐにその場を離れる。

「トオル！？ どこへ行くのー！？」

「すみませんー！」

呼びかけに背中では謝りながら、それでも一目散に頂上を目指して  
走っていった。

「あーあ……病み上がりだっつうんに フラフラじゃねーか……」  
「あらありさ……病み上がりとはちよっと違うのよ……っ？」  
「似たようなもんだろ？」

「まあ……いいんじゃない……？」

それまで、黙って後姿を目で追っていた春が穏やかに微笑する。  
と、まるでそれにつられたかのように、周りも同じ様な表情を浮かべ、透の背を見送った。

「……だっ」

2

「……っ」

「……は……」

二人が頭を抱えて上半身を起こした時

闇の中心に浮かぶ 淡い光

見たことのない 銀髪の 綺麗な女性と、  
あの子供が立っているのが目についた。

が、

透の姿が見当たらない。

どこにも

「……っ ……おい……っ、クソガキ……っ」

「〜本田さんはどうしたんだ!？」

子供を 睨みつけ、  
ヨロヨロと、その場に立ち上がる。

二人の怒りと不安の入り混じった声を耳にし、ほとんど反射的に  
そちらを振り返った女性と子供。

二人の姿を その表情を見るや否や、  
子供は 由希や夾が見たことも無い、戸惑ったような表情を浮か  
べる。

そこに、常に鎧の様に纏っていた邪気は もう無い。

子供の様子の変化に、由希と夾は僅かに躊躇する。

やがて、口を開こうとした子供を制し、傍らに立っていた女性が  
透き通るような……か細い声を上げた。

『透チヤンは……目覚めたようですね……』

……あのままの状態が続けば、本当に危なかったですから……』

女性の視線を受け、子供も頷く。

『……操っていた人間達も……そろそろ目が覚める頃だと思つよ』

「……あ?」

子供の柔らかな雰囲気、

二人のその親しげな様子に  
いまいち、状況が飲み込めない由希と夾。

夾が、素つとん狂な声をそのまま上げると、  
由希は っ少しだけ怪訝そうな色を残したまま、おずおずと口を開く。

「あの……あなたは？」

その視線から 二人から庇うように、守るように  
今度は子供が、女性の前に出た。

『僕のねえさまだよ』

「……って、切り倒されたんじゃないのかよ」

言葉を飲み込むや否や、咎めるような声を上げる夾。  
子供は、その細い肩をビクッと震わす。  
罪悪感からか、その顔色は青い。

明らかに 先程までと様子の違う子供の態度に  
その表情に  
夾も、由希も眉を顰める。

ついには、うつむいてしまった子供に代わって 「姉」と称された女性が、子供の頭を撫でながら語り出した。

優しげな、しかしどこか憂いを帯びた視線を子供に向けたままで。

『ええ……力のほとんどは無くなってしまいました。』

すでに実態もなく、今はこうして想いを形に留めているのが精一杯です……………」

「想いを…………形に…………？」

『残留思念というものを考えていただけるとわかりやすいかもしれません』

「…………幽霊みてえなものなのか？」

『そうですね』

女性は俯いたまま 少し寂し気に微笑んだ。

『元々”わたし”は、本当に幽霊でしたから』

その場に居た、全員

その言葉を飲み込むのに少々の時間を要した。

沈黙によって齎された静寂が 少しの間だけ辺りを支配する。

「…なんだって？」

それは、

子供も同じだったらしい。

『ねえさま…………？』

自分の知らない言葉　姉と慕っていた存在の過去に、不安げな表情で女性の顔を見上げる。

『……あなたにも　話した事がなかったわね……』

視線を真つ向から受け止め

女性は、その細面に苦笑を浮かべる。

瞼を伏せるも　しかし女性ははっきりした口調で語る。

『　　¥”わたし”。人間だったんです』

「なんだって？」

「人……間？」

ただ、瞳を見開き　透き通った体を改めて凝視する二人。

瞳を瞑ったまま

女性は　淡々と答えた。

『ええ……この桜の木の枝で、首を吊ったんです』

「……」

『”わたし”の魂は、成仏を許されなかったみたいですね……  
そのままこの桜に取り込まれて……、

……もう何百年も、昔の話です』

『そんな……』

ねえさまが、人間……！？』

その事実を受け止めるのに、必死だったんだろう。

2人に遅れて、しかし 2人以上に、強い反応を示した子供。

細い手は 撫でるのを止め

うつすらと瞼を開けると

驚きに見開かれたその瞳に映し出された自身の顔は、穏やかに苦笑していた。

『わたし”と接する内に、あなたにも変な力が宿ってしまったみたいね……』

”わたし”のこの力は……人間として生まれたその時からすでに持っていた力だから……』

「どっし……て」

神隠し、なんて

そう、続く言葉を見越したのか、

『……必要、と、されたかったのかもかもしれません』

横から響いた声に由希を振り返ると、女性は真っ直ぐにその瞳を見た。

「……」

目が合って、

その瞬間に由希は、何かを感じ取る。

しかし、

靄のかかった、はっきりとはしないソレの正体は何なのかわからずに、

ただ、その戸惑いの瞳で、女性の瞳を見つめ返すだけだった。

由希のその感情に気づいたのか、  
女性はやはり、苦笑を浮かべる。

どこか哀しみを帯びた 憂いの表情で。

3

『生まれてきてから、”わたし”は裏切られてばかりだったんです。  
親にも、友達にも……恋人も。』

そうやっていつしか  
自分を生み出した世界の何もかもが……、  
……いいえ。  
世界そのものが信じられなくなって

……ただ 真っ暗で

そこには 確かに何もかもが揃っているはずなのに  
でも”わたし”には 何も 見えなくて  
見えてこなくて

だから、

自分が生まれてきた意味      そこに存在する答えがわからなくて  
……見つからなくて

それは

とてもとても 不安だった……

何をやっても  
どこへ行っても

光なんて無くて

何をしたって

どこまで行っただって いったって

”わたし”は

この闇の中心に

独り……で

……命を絶てば 救われるかと思ったの

総ての柵から

絶望から

開放される、と……信じていたの

……けれど実際は

この木に取り込まれてしまって

身動きが取れなくなっただけで、

今度は 逃げることもすらも 出来なくなった

孤独は変わらなかった

自分の弱さを責める……それはまるで罰であるかのようだ……『

『……ねえさま』

『だから、同じ様な死にたがりの人達に

……せめて、夢を見せてあげたかったの

儂くても

……一瞬でも』

「……」

再び静かに瞳を閉じて

ゆっくりと上げた腕

その手を胸元にあてる

『……せめて

満たされていってほしかったの』

一言一言、思い出しながら語るその表情は自嘲気味に、笑みの形に歪む。

が、次の瞬間。

『だけど、今日子に会った』

顔を上げた女性は、穏やかに微笑んでいた。

『いつものように取り込もうとして、頭に触れようと接触した時、今日子に言われたわ……』

……”わたし”は、ズルって』

その銀色を帯びた瞳は　ただ真っ直ぐに

前を見上げる。

『言ってくれないとわからない……って

独りで抱えて　隠してしまえば、誰にも見つからないのは当然だ  
って

意味や理由は　無いなら無いで構わない  
後になって必ず　見えてくるものだから

今欲しいのなら 自分で勝手に作ってしまえばいい

それが「世界」の中心なんだから

そうやって 開き直ってればいいじゃないか……って『

周りや自分を責めるだけの

恨み辛みをただ悼み慰めるだけの毎日は、とても楽だろうけど

楽しくはないだろう……？

4

痛くても

独りきりで 何もみえなくなってしまうても

信じることに疲れてしまっても

絶望だけが残ってしまったても

闇の中でも

決して 自分を

見失わないで

そうやって 誰もが泣きながら 体を引きずって歩いていく  
羽なんてどこにもないんだから。

それが

生きるという事。

『振り返ってみると、”わたし”はいつも  
怖がって……ばかりだったんです

裏切られるという 恐怖。  
置いていかれる 哀しみ。  
捨て置かれた ……痛み。

自分の信じるモノが 消え去る瞬間

もう二度と 感じたくなかったから  
壁を作って 何もかもを遠ざけた。

でも、

それは結局 逃げているのと一緒に  
答えが見つかるはずがなかったんです……』

由希も

夾も

黙っていた。

ただ

その視線だけは 逸らすことを許さずに

真っ直ぐに 女性を捉えている

『「優しくして欲しい」と泣いてねだるのは 他に手段を持たない  
赤ちゃんだけ……

誰かに愛してほしいのなら

どんなに怖くても、

……それが痛くても

自分を信じて、受け入れないと駄目なんですよね……

相手の事も

自分自身の事も

……過ぎ去って 儚く消えてしまったものたちの事も

決して

目を逸らさずに』

『……………』

子供も やはり

片時も逸らさずに 女性の顔を見上げている。

それは 最初に見た、あの底の抜けた空洞のような目ではなく、  
強い意思のこめられた、真摯な瞳で。

似ている、と  
同じだと 感じた

彼女の話が  
孤独で、どうしようもないほど痛かった、  
さっきまでの自分と重なる

彼女が  
まるで、自分を代弁しているかのような、そんな錯覚を覚えた  
こいつらも

ふと、視線を 同じように片時も彼女から目を離そうとはしない  
由希と夾に移す。

コイツラも そうなのか……？

『求めるばかりで。

そのくせ、過去の存在に嘆くばかりで。

大事な思い出すら忘れてしまおうとしていた それらが作り出した現実を否定するだけの”わたし”には、考えもしなかったことを、今日子が……』

(思い出は……、それが、どんなに痛くても……捨ててしまつては……駄目なんです……っ)

『……それから、透ちゃんが、教えてくれました』

馴染みある名前にぴくっと小さく反応を示す、由希と夾。  
瞬時に。

彼等の脳裏に

咲く花

『由希君』

彼女は

それが自然な事であるかのように 傍に居て

『夾君』

当たり前の事のように  
惜しむことなく 笑顔を降らす

誰よりも

誰かの倅を喜び  
誰かの笑顔を祈る少女

……温かくて  
かけがえの無い

傍にいたくて  
どうしようもない

それは

泣きたくなる程の衝動

知るよしもなかった感情を

……狂おしい程のいとおしさを 教えてくれる人。

□ 人が

「死にたい」と思うのは、  
弱さからくる愚痴みたいなものだから

それは

強い「願い」の裏返しなのだから

折角の強くなるチャンスを、摘んでしまつては駄目だと言われま  
した……

……それは

独りきりでは ほんの小さな声……

小さな 見落としてしまう程に小さな

衝撃が来ればすぐに消えてしまうような光  
でも

誰かを想えば

想う程に 強くなる 』

由希と夾の瞳を見つめ 優しく微笑む。

5

『……今日子は、

”わたし”の話を聞いてくれました。

”わたし”が二度と寂しくならないよう、毎年一度”わたし”に会いに来てくれる事を約束してくれました。

”わたし”も、

もう人は取り込まない事を、彼女に約束しました。

取り交わされた約束が何年か続いて……一年なんて短いもので、今日子が透チャンを連れて来てくれることを、とても心待ちにするようになりました。

『……けれど』

そこまで言い終え、一旦閉ざされた口。

少しだけ

落とされた視線。

『数年前から

今日子が 来なくなつて……』

浮かべた、濃い哀の色を

『信じていましたが……それはやはり寂しいものでした』

隠すように、彼女は苦笑した。

そのまま視線をさらに落とせば 丁度位置する子供の瞳を捉える。

『その不安を……この子に感じさせてしまったのでしょっね……』

『ねえさま……』

『本当に ごめんなさいね……

……随分酷いことをさせてしまった

本当はあなたは とても純粋な、優しい子なのに……』

至極すまなさそつに

女性は瞳を伏せる。

反論しようと 子供は一瞬口を開きかけたが、  
しばしの間 その口は何も紡ぐ事なく、閉ざされてしまった。

沈黙するのを見届けてから  
改めて女性は 由希と夾を振り返った。

『…………でも、

”わたし”は 真の意味で初めて  
誰かを…………自分を、信じるということが出来たと思います

今日子の事を

…………ずっと信じていた…………』

瞳を閉じて

思い浮かべる大切な笑顔はしかし

少しだけ 霞んでしまって いて

『……ですが、もうあの笑顔には……』

……その事実が 今もなお この胸をしめつける。

ほんの

『……… 会えないのですね………』

ほんの

少しだけ……

『今日

透子ちゃんに触れて

もう一度、彼女の中の今日子に会うことが出来て……

……それが、わたしに最期の方

『勇気を くれたんです』

見開かれた銀の瞳には、

痛みに歪んだ色は もう どこにも見当たらなかった。

『心残りは……この子の事だけでしたから……』

いつでも

どこまでも真っ直ぐで純粹な、

好奇心の塊で出来ているかのような大きな目で 自分の事を見上げ続けていた。

今

その大きな瞳には 今にも零れ落ちてしまいそうな涙が浮かんでいる。

『……だいじょうぶ。あなたなら

だって ”わたし” が今日子の事を待ち続けていられたのはあなたのおかげでもあるんですもの……』

『……………』

やがて訪れるであろう孤独に

未だ 小さく震える手

竦む様な 底なしの不安と 恐怖

それでも

溢れ出る雫を　しかし子供は、  
気丈にもその手でぐいっつと拭い  
今度こそ

彼女の問いに　笑顔を見せた。

『僕も約束するよ　ねえさまに。  
生きていく。』

ねえさまに貰ったこの力を……心を、大事にする。  
もう　捨てたりなんかしない。

今はまだ……怖いけど  
僕も、「勇気」に変えてみせる。

……絶対』

子供の言葉に

何度も、何度も頷く女性。

『ねえさまから生まれた、新しいトモダチにねえさまの話を話  
すんだ。』

きつと数十年、数百年はつきないよ。

だから

寂しくなんか、ない……っ　ないから……

……安心して。

今度こそ

……ゆっくり　休んでね……』

女性はもう　何も言えずに

子供を抱きしめた。

……今知っている言葉だけじゃ　決して足りない。

それでも 止め処なく溢れるこの感情が

どうか この子に伝わりますように……

『……ねえさま』

さびしい。

つらい。

かなしい。

すがりつきたい。

だけど それでも。

子供は腹の底に力を入れて、精一杯堪える。

自分は、この憂いを帯びた笑顔を浮かべる女性に

たくさん 大切なことを 教わった。

誰かを愛する事によって生じる

痛みや

寂しさや

哀しみを

優しさや

強さを

教わった

その位 たくさん

自分を……愛してくれた

自分は

……愛されていたんだ

こんなにも

『ありがとう』

……ねえさま  
『ねえさま』

自分を包む細い腕。

その温かさを 自分に向けられた愛情を全身で感じながら

子供は静かに瞳を閉じた。

この温もりが 糧になる

留め置ける、「心」というものを自分は持っているから

乗り越えられる

……乗り越えてみせる。

きつと

静かに  
頬を流れる、一滴。

と、

その時。

「…………お!？」

「なんだこれ…………」

6

「…………お!？」

「なんだこれ…………」

由希と夾の身体を、光が包みこんだ。  
光は徐々にその輝きを増していく。

『また新しい日が、昇り始めたのね…………』

光に驚いて、そちらに向き直った女性が口を開く。

「え?」

『わたしたちが、人に影響しえる力を使えるのは夜の間だけですか  
』ら

「って、俺達、どうなるんだ?」

『その内に。元の身体で目覚めると思っよ。タオルと同じ様に』

子供が涙を拭いて だがしっかりと由希と夾を見る。

『今の状態は魂だけだから』

少しだけ すまなさそうに。

「あ？ そうなのか？」

「なんだ。気づいてなかったのか？ 馬鹿猫」

呆れかえった視線を夾に投げる由希。

「んだと……っ じゃあおまえは気づいてたのか?!」

「当たり前だろ……おまえじゃないんだから」

「すかしてんじゃねえぞコラ!!」

徐々に増す光の強さに、しかし構うことなく続く二人の口論を呆然と見、いつしか笑い出した女性と子供。

聞こえてきた笑い声に、由希と夾はようやく言い合いを中断し、バツが悪そうな顔でそちらを振り返る。

一頻り笑った後、女性と子供は改めて、彼等に向き直った。

『……透ちゃんに伝えてください。「ありがとう」って……』

「わかりました」

『「約束」、忘れるな……って。言っといってくれよな』

「『約束』だ？ なんだそりゃ？」

『秘密』

「てめえ……最後まで可愛気のないガキだったな……っ」

『……悪かったな……』

「……」

俯いてしまった子供の様子に、夾はしばらく腕組みをして考え込んでいたが、

やがて、つかつかと子供の近くまで歩み寄る。

「く悪かった」

唐突に

子どもに向かって その光を帯びた右手を差し出した。

「……………え？」

意味がわからずに、子供は夾の顔を見上げる。

「だからっ

悪かったっつってんだよ……………その、事情知りもしないで、……………  
化け物』呼ばわりしてさ

……………俺だって、似たようなもんなのに」

「……………おまえって……………」

「ああ？」

「実は お人よし……………？」

「ンなんじゃねえよ！！ ただ……………一言謝ったときただけだ……………  
……………」

「……………」

差し出された手を

握らずに、子供は夾と小指をからめた。

『おまえも約束したからな……っ』  
「は？ ……って、だから約束ってなんなんだよ?!」  
『だから秘密って言うてるだろう？ 戻ったらトオルに聞きなよ!』  
「くおのガキ……!!」  
『……ずっと気になってたんだけど。』  
「ガキ」じゃないよ。僕コレでも数十年は生きてるから』  
「あ？ う、嘘だろ!？」  
『おまえなんか嘘ついてどうするのさ』  
「『なんか』は余計だ!！」

喧騒のその隣では、由希が、女性と向き直っていた。

『本当にありがとう。 最期にあなたたちに会えてよかったと思うわ』  
「……あの』  
『……?』  
「ずっと気になってたんだけど、俺達って……」  
『……』  
「その、どこかで……」

言いかけた由希の口を女性は人差し指1本で閉ざす。

『……「秘密」は 多いほうが楽しいでしょう?』

そう言って微笑んだ、女性の顔が段々と霞んできた。

気づけば 自分らが纏っている光……その輝きが、強くなっていた。  
た。

太陽が昇り始めたのだ。

『……元気で。あなたたちも……どうか負けないでね……っ』  
『「約束」忘れるなよ!?!』  
「あの、やっぱり貴女は……!?!」  
「だから……約束ってなんな……!?!」

瞬間

膨大な量の光が弾け、由希と夾の身体を包み込み……

……その姿と共に、消える。

やがて

静けさを取り戻したそこには、すでに闇しかなかった。

『……、  
……いつちゃった……ね』

子供が ぽつりと呟く。

『今日のロトは、夢みたいに見てほしいね……』

『大丈夫だよ。「約束」したからさ』  
『……そうね』

微笑する女性。

自分も微笑みを返そうと 見上げたその姿が……  
……女性が居る、辺りの空間そのものが

ゆらりと揺らぐのを  
子供は……見逃さなかった。

一瞬で  
総てを悟る。

この「女性」は……  
女性は、やはり、もう……

『……』

『……？ どうしたの……？』

少しだけうつむいて、  
次の瞬間には。

『なんでもないよ』

再び、満面の笑顔で、子供は「女性」を見上げた。

……その手を握り。

確かにここに在る、彼女の温かさを感じる。

『でも、ねえさま…… さっき銀色の髪の方が言ってたことって……  
…結局なんだったの？』

聞かれて、「女性」はしばらくその瞳を泳がせていたが……

『……そうね……あなたになら 教えてあげてもいいかもね』

どこか悪戯っぽく、しかし、いつものように 優しい笑みを浮かべた。

徐々に霞みゆく姿で。

その、長い銀の髪を揺らしながら。

7

「はあ、はあ……」

もはや 自分の息遣いと、  
壊れそうな程激しく響く鼓動の音しか聞こえない。

寒さに麻痺したのか、手足の先の感覚はほとんど失われていた。

それでもなお、頬を刺す、痛い程の冷気が、その分  
肺を満たす、澄んだ空気。

桜並木に囲まれた、薄桃色の雨が舞い散る坂を  
流れる 長い栗色の髪。  
真白の息を吐きながら、少女は懸命に駆け上がる。

前へ。

前へ。

季節外れの幻想的な世界には目もくれず。

息せき切って、足がほつれて  
何度も何度も 転びそうになった。

それでも 前方だけをその瞳に捕らえ  
透は 足を止めなかった。

早く。

早く。

夢の中で何度も行き来していた道が、  
やけに懐かしく感じる。

あの時は、言いようのない不安だけが彼女の前進を急かした。  
が、

今では……たった一つの強い想いだけが 彼女を動かしている。

ただ、一心に想う事は。

会いたい。

……今すぐ。

やがて、

桜が開ける。

朝ぼらけの空の下。

正面　中央の切り株の上　に立つ、

見上げるまでに大きく、視野に入りきれない程見事な、赤い桜の  
イリュージョン。

舞い踊る鮮やかな赤に、目を奪われそうになりながらも。

周りに倒れているたくさんの人々を踏んでしまわないように細心の注意を配りながら、奥へと進む。

目指す夢桜花の下で

辺りをキョロキョロと見渡しながら、ゆっくりと、その場に身を  
起こした二人の男。

「……っ」

彼等を視界に捕らえるなり、

透は、全身全霊で　その名を叫んだ。

「〜由希君っ!!」

夾君!!」

響く心地よい音に瞳を見開き、そちらを振り返った二人は。

「…………とお…………!!?」

「本田さ…………?」

飛び込んできた泣き笑顔と、  
伸ばされた細い腕、  
その柔らかな感触に、

ほんの一瞬 ……我を失う。

BOM!!

「…………ありがとう…………、…………ありがとう…………!!」

鼠と猫を抱きしめながら、  
震える声で、ただ一言を繰り返す少女。

二人はその温かさを、

「くありがとう……くごいます……っ」

全身で 感じる。

冷たい、しかしどこか、穏やかな風に  
優しく流れる艶やかな髪が、身体をくすぐる。

滴り落ちた温かい雫が。

二人の身体を濡らす。

そうやって 一瞬一瞬がスローモーションのように  
穏やかに ゆっくりと 流れゆく。

それは

なによりも 永遠を願わせる光耀。

彼女が居る、たったそれだけで。

なんと 世界の優しいことか。

「お帰り……本田さん」

「おかえり……な……」

ぞあぁあ……

一際、風が強く吹きつけた。

イリユージョンの赤桜の花びらは、やがて白く変化し、透たちの元に 雪のように降る。

はらはら、はらはら……

……まるで、

一人と二匹を、包み込むように。

e p i l o g u e

「つかし……すげえな…… ……時期外れもいいところだぜ……」

眼下に広がる、満開の桜の木々の群れ。

見下ろした夾が、透の肩で感嘆の声を上げる。

由希と夾の服を拾い集めていた透。

「みなさん……きつと、この方達を祝ってくださっているのですよ」

呟いて振り返ると、

そこにはもう

大きな切り株が 一つ 在るだけだった。

「……………」

その切り株の中央に  
新しい緑が 芽吹いている。

その横に……まるで寄り添うようにして  
小さな小さな桜木が1本生えているのを、透は見つけた。

「もう……寂しくなんか、ないですよね……」

その細い躰に優しく触れて 透は微笑む。

「けど、なんか……夢みたいな夜だったよね……」

透の頭に乗っていた由希が、感妙深げに呟いた。

「それにしちゃけにハタ迷惑で長エ夜だったかな……」

ため息交じりの夾の声に、透はクスッと笑う。

「そうですね……ですが」

言って、透はもう一度、満開の桜達を見下ろす。

「夢にしておくには、もったいない景色です……」

「そうだね……」

「……だな」

朝焼けに包まれた町並み。  
昇る穏やかな日に照らされて。

始まる。

新しい一日。

代わりのない 日々。

「トールう！！ ユキ、キョー！！」

聞こえてきた声を辿れば

白く しかし鮮やかな桜並木の道を、紅葉を筆頭に、

春。

魚谷。

咲。

紫呉。

はとりが歩いてくる。

「絶好のスポットを3人占めだなんて許しませんよ？」

「由希に夾…… ナイスファイト……」  
「……つて、おい、透。あいつらどうした？ 王子ときょん」  
「〜!？」  
「は？ え……!？ 〜えとその……、あ、あちらの方で桜さんを見ていらつしやるかまなのですっ!！」  
「……っ」  
「しゃーねえなあ…… 折角透が起きたつつつのに独りにさせやがってあんにやる……っ」  
「あらそう……？ 気配はとても近くに感じるんだけど……」  
「……さ、咲ちゃん……っ」  
「折角だからついでに俺らもレッツ花見……」  
「お花見するのー!！」  
「おお!！ いいなそれっ」  
「うわあ…… 素敵な提案ですっ」  
「いいわね…… お団子が食べたいわ……」  
「酒とつまみもな」  
「つて、ええ?! ぼ、僕が買い出しに行くの……!？」  
「寝てただろ？」  
「は、はーさあん…… ひよっとしなくても…… 根に持っていたりする……?」  
「もちろんだ」

想いは 尊く  
願いは 果てなく

今も わたしの胸に残る。

この愛しさや

苦しさを。

……切なさを、

けして 忘れないように。

大切だと思える存在と共に  
抱えて、今を 生きていこう。

答えや 意味が。

きつと判る時が来る。

その瞬間の 自分のために。

「終」



桜 まといが最期に見せた幻影は『まとい』。

話の後半で現れた彼女のその姿はあくまで、一週間前、まといが断ち切られる瞬間に、最後の力で作り出した幻影に過ぎません。

「透に触れる事によって力を蓄える事ができた」と彼女自身が言っています。その実、まといの意識はすでに事切れています。

何故あそこでタイミングよく現れたのかと言えば、幼木が透達に触れる事によって、より「人らしい心」というものを持ち、その心をもって段々と強く、「まとい」を望んだからです。

まといの力（幻影）は、見せる対象の心を汲むものですから。対象の望む力が弱ければどんなに力を使っただって対象に幻影を見せることは出来ないのです。

尤も。

幼木は、透等に会う前から まといに触れ、彼女に好意を寄せる頃にはすでに「心」を持っていたのですが。

それはまだ真っ白で。あまりにも、幼かったのですね。故に最初に登場した時の幼木は、「復讐すること」、ただそれだけを考えていました。

そして透。

彼女は、幼木を心配し、幼木がどうしたら笑顔になるのかを考えていた……それを強く想った事が、幻影「まとい」を発動させる要因の内の一つになっています。

ちなみに、由希と夾にも「まとい」を見る事が出来たのは。

彼等も、多少なりとも幼木の事を心配していましたし、

それになにより、幼木の想い願ひ希望を受け「まとい」の幻影がすでに強く、色濃くなっていたからです。

ですから、話中、まといはすでにこの世にいません。

幽霊でもなんでもありません。

話中に存在しているのは、  
幼木と話をしているのは、

ただただ、幼木が心配で、切り倒される直前まで彼女が思いを込めて作り上げた……今までで一番の最高傑作幻影、『自身の幻影』  
なのです。

> i 6 5 4 1 — 1 0 5 2 <

まとい 第一稿（長崎ちゅうた）

> i 6 5 4 2 — 1 0 5 2 <

まとい 第二稿（長崎ちゅうた）

幻影は見る者の意思によって終わらせる事が出来ます。

幼木が望む限り、「まとい」は永遠に「生きる」「し」。

幼木が、一人でも強く生きていける決意をしたら 「まとい」  
を必要としなくなった時、初めて幻影は消え、幼木は、自分に対する彼女の深い愛情を知るのです。

> i 6 5 4 3 — 1 0 5 2 <

まとい 第三稿（長崎ちゅうた）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6799d/>

---

桜花夢夜

2010年10月9日08時58分発行